

い　え　う　だ　　い　せ　き

# 井相田C遺跡 10

— 井相田C遺跡第11・12次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1253集

2 0 1 5

福岡市教育委員会

い　え　う　だ　　い　せ　き

# 井相田C遺跡 10

— 井相田C遺跡第11・12次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1253集



調査番号 1310 1343  
遺跡略号 ISC-11 ISC-12

2015

福岡市教育委員会

題字は、福岡市東区青葉在住の松下さゆり氏の揮毫による

# 序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、21世紀の今日も更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、博多区井相田二丁目地内で実施した共同住宅の建設に先立って実施した井相田C遺跡の第11次調査と第12次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、古墳時代の堅穴住居や溝と古代に開削された井戸からなる集落跡の一部が発見されました。なかでも古代の井戸は、建築部材などを転用した厚い板材を打ち込んで井側としたもので、当時の井戸の構造を考える上で貴重なものです。井相田C遺跡周辺では、弥生時代から古墳時代を経て中世に至る堅穴住居や掘立柱建物などのほか水城東門から延びた古代の官道が報告されており、井相田の丘陵上や沖積地の微高地上には弥生時代から中世の集落域が広範囲に拡がっていることが分かっています。今回の調査で検出した遺構は、この地における古墳時代から古代へと続く集落域の展開を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、施主をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

れいげん

- I. 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅の建設に先立って、2013（平成25）年度に福岡市博多区井相田2丁目で実施した井相田C遺跡の第11次調査と第12次調査の発掘調査報告書である。第11次調査は、2013（平成25）年6月10日～8月21日（Ⅰ区）と2013（平成25）年10月17日～11月22日（Ⅱ区）の2回に亘って福岡市博多区井相田2丁目3-7で実施した。また、第12次調査は、2014（平成26）年2月3日～3月17日在福岡市博多区井相田2丁目2-8で実施した。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、堅穴住居をSC、井戸をSE、土壌をSK、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を01から通番してNoを付した。但し、第11次調査では、混乱を回避するためにⅠ区は001から、Ⅱ区は101からNoを付した。
4. 本書に掲載した遺構の実測と製図は主には小林が行ったが、遺物の実測と製図は小林と谷直子が、また、現況図は田中朋香の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
6. 本書の編集と執筆は、谷の協力を得て小林が行った。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1310	遺跡略号：ISC-11	分布地図番号：12-2630
調査地籍：福岡市博多区井相田2丁目3-7・12		
工事面積：1,925m <sup>2</sup>	調査対象面積：431m <sup>2</sup>	調査実施面積：530m <sup>2</sup>
調査期間：2013年 6月10日～ 8月21日（Ⅰ区） 2013年10月17日～11月22日（Ⅱ区）		
調査番号：1343	遺跡略号：ISC-12	分布地図番号：12-2630
調査地籍：福岡市博多区井相田2丁目2-8		
工事面積：1,680m <sup>2</sup>	調査対象面積：604m <sup>2</sup>	調査実施面積：625m <sup>2</sup>
調査期間：2014年2月3日～3月17日		

# 本文目次

序	
I.はじめに	1
1.発掘調査にいたるまで	1
2.発掘調査の組織	1
3.立地と歴史的環境	3
II.調査の記録	8
1.第11次調査	8
1)調査の概要	8
2)I区の調査	8
1 I区の概要	8
2 基本的層序	9
3 積穴住居	9
4 土 壁	10
5 井 戸	12
6 溝	17
7 ピットと包含層出土の遺物	24
3)II区の調査	25
1 II区の概要	25
2 基本的層序	25
3 土 壁	26
4 溝	29
5 包含層出土の遺物	30
4)小 結	30
2.第12次調査	31
1)調査の概要	31
1 基本的層序	31
2 土 壁	33
3 包含層出土の遺物	33
2)小 結	33
III.おわりに	34

# 挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1 / 25,000)	2
Fig. 2 井相田C遺跡位置図(1 / 5,000)	5
Fig. 3 井相田C遺跡第11・12次調査区位置図(1 / 2,000)	6
Fig. 4 井相田C遺跡第11・12次調査区周辺現況図(1 / 1,000)	7
Fig. 5 第11次調査区遺構配置図(1 / 400)	8
Fig. 6 I区遺構配置図(1 / 200)	9
Fig. 7 I区北壁土壌断面実測図(1 / 80)	10・11
Fig. 8 15号住居実測図(1 / 60)	10
Fig. 9 3・5・41号土壌実測図(1 / 30)	11
Fig. 10 3・5号土壌出土遺物実測図(1 / 4)	11
Fig. 11 16号井戸実測図(1 / 30)	12
Fig. 12 16号井戸出土遺物実測図(1 / 4)	13
Fig. 13 16号井戸井側材実測図1(1 / 8)	13
Fig. 14 16号井戸井側材実測図2(1 / 8)	14
Fig. 15 16号井戸井側材実測図3(1 / 8・1 / 16)	15
Fig. 16 16号井戸井側材実測図4(1 / 8)	16
Fig. 17 1・4・40号溝実測図(1 / 100)	18
Fig. 18 1号溝出土遺物実測図(1 / 4)	19
Fig. 19 1号溝出土遺物実測図2(1 / 2・1 / 4)	20

Fig.20	1号溝出土遺物実測図(1／4・1／8) .....	21
Fig.21	2号溝実測図(1／100) .....	22
Fig.22	2・40号溝出土遺物実測図(1／4) .....	23
Fig.23	19号ピット実測図(1／20) .....	23
Fig.24	ピットと包含層出土遺物実測図(1／2・1／4) .....	24
Fig.25	II区東壁土層断面実測図(1／200) .....	25
Fig.26	II区東壁土層断面実測図(1／60) .....	26
Fig.27	103・104・109・117・124号土壤実測図(1／30) .....	27
Fig.28	117・119号土壤出土遺物実測図(1／1・1／4) .....	28
Fig.29	101・102・122号溝実測図(1／100) .....	28
Fig.30	101号溝出土遺物実測図(1／2・1／4) .....	29
Fig.31	包含層出土遺物実測図(1／4) .....	30
Fig.32	第12次調査区遺構配置図(1／200) .....	31
Fig.33	1～3号土壤実測図(1／20) .....	32
Fig.34	包含層出土遺物実測図(1／1) .....	33
Fig.35	第11・12次調査区周辺図(1／2,000) .....	34
Tab.1	井相田C遺跡発掘調査一覧表 .....	4
Tab.2	16号井戸井側材一覧表 .....	18

## 図版目次

- PL. 1    1) 第11次調査区Ⅰ区全景 (南から) CG合成  
          2) 第11次調査区Ⅰ区全景 (西から) CG合成
- PL. 2    1) 15号住居 (北から)  
          2) 5号土壤 (南から)  
          3) 3・41号土壤 (南から)
- PL. 3    1) 16号井戸 (西から)  
          2) 16号井戸井側 (西から)  
          3) 16号井戸井側断面 (南から)
- PL. 4    1) 16号井戸断面 (南から)  
          2) 1号溝 (西から)  
          3) 1号溝遺物出土状況 (南から)
- PL. 5    1) 1号溝遺物出土状況 (南から)  
          2) 2号溝遺物出土状況 (南から)  
          3) 19号ピット遺物出土状況 (北から)
- PL. 6    1) 第11次調査区Ⅱ区全景 (西から) CG合成  
          2) 第11次調査区Ⅱ区全景 (北から) CG合成
- PL. 7    1) 103号土壤 (東から)  
          2) 104号土壤 (北から)  
          3) 117号土壤 (西から)
- PL. 8    1) 124号土壤 (南から)  
          2) 101号溝 (北から)  
          3) 122号溝 (西から)
- PL. 9    出土遺物1 (縮尺不同)
- PL.10    出土遺物2 (縮尺不同)
- PL.11    1) 第12次調査区全景 (東から) CG合成  
          2) 第12次調査区全景 (南から) CG合成
- PL.12    1) 1号土壤 (北から)  
          2) 2号土壤 (東から)  
          3) 3号土壤 (東から)  
          4) 出土遺物 (縮尺不同)

# I. はじめに

## 1. 発掘調査にいたるまで

井相田C遺跡は、福岡市と大野城市が境を接する福岡市の東南端にあり、御笠川によって形成された沖積地には田園が広がるのどかな農村地帯であった。しかし、近年は社会環境の変化による村落の市街化が進み、一面の田畠は埋め立てられて住宅や工場などが立ち並び、昔日の田園風景は次第に失われつつある。この井相田C遺跡として周知された埋蔵文化財の包蔵地では、これまでに10地点で発掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代の集落跡や大宰府から延びる古代の官道「水城東門ルート」などが検出されている。

このような環境下にあって、井相田二丁目3番7で共同住宅の建設が計画され、平成25（2013）年4月20日に埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。これを受けて文化財部埋蔵文化財審査課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井相田C遺跡の東部に位置することから平成25（2013）年5月10日に試掘調査を実施した。その結果、申請地東側の地表下110cmで沖積層を検出し、その沖積層上で須恵器や土師器を伴う古墳時代から古代の溝や土壤などを確認し、遺構群の保全について申請者と協議したが、埋蔵文化財への影響が回避できないことから記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。この合意に基づいて平成25（2013）年6月5日付で申請者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結して平成25（2013）年6月10日から発掘調査を着手し、平成25（2013）年8月21日に終了した。ところが、調査着手時には未計画であった南接する井相田二丁目3番12で新たに共同住宅建設が計画され、調査終了間際の8月6日に埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。すでに隣地で発掘調査が実施されていることから8月19日に試掘調査を実施した。その結果、北側の調査区と同様に溝や土壤を検出したが、建造物の構造的事由から発掘調査を実施することとなった。その結果、再度委託契約を締結し、平成25（2013）年10月17日から発掘調査を、平成26（2014）年度に資料整理と発掘調査報告書の作成を行うこととなった。便宜上、前回調査をⅠ区、今回調査をⅡ区とした。

一方、第11次調査区から市道を挟んだ西の井相田二丁目2番8でも共同住宅の建設が計画され、平成25（2013）年9月27日に埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。申請地周辺では、弥生時代から古代の遺構が確認されていることから平成25（2013）年10月18日に試掘調査を実施し、鳥栖ローム層上で柱穴を検出した。建築物の基礎構造がローム層下深くに及ぶために遺構の保全が不可能なために記録保存の発掘調査を実施することとなり、申請者と福岡市長とで発掘調査業務の委託契約を締結し、平成25（2014）年2月3日から3月17日まで発掘調査を実施した。両事業ともその事業形態から国庫補助事業と受託事業とを併せて行い、発掘調査報告書も合本とした。

## 2. 発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 文化財部埋蔵文化財調査課

埋蔵文化財調査課長 常松幹雄（現任） 宮井善朗（前任）

埋蔵文化財調査課調査第1係長 吉武 学（現任） 常松幹雄（前任）

調査庶務 埋蔵文化財審査課長 米倉秀紀 横田 忍（第11次調査）

川村啓子（第12次調査）

調査担当 埋蔵文化財調査課調査第1係 小林義彦

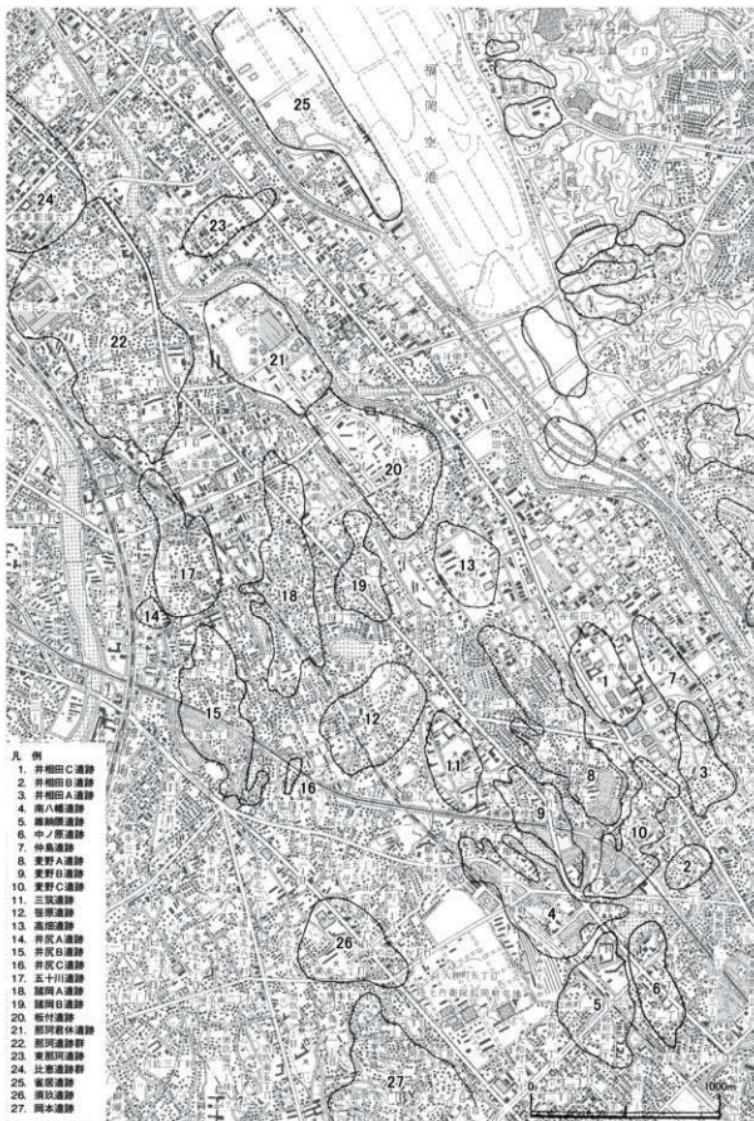


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

技能員 谷 直子

発掘調査・資料整理 廣瀬恵（京都大学） 秋本君子 伊藤美伸 浦崎てい子 大場久美子

小野千佳 兼田ミヤ子 板梨美紀 田中朋香 知花繁代 土斐崎孝子 遠山 熊

豊丸秀仁 西田文子 野口リウ子 濱フミコ 日高芳子 増田ヒロ子 松下さゆり

森田祐子 渡部律子

発掘調査から資料整理に至るまでは、地権者や施工事業者をはじめ、猛暑や嚴寒の中で発掘作業に従事された方々のご協力に改めて謝意を表します。

### 3. 立地と歴史的環境 (Fig. 1~3)

玄界灘に面して開口する福岡平野は、東を三郡山地からのびる丘陵性の小山塊に、南を背振山地に、西は背振山地から派生した油山の小山塊によって囲繞された小平野である。この福岡平野の東縁には、四王寺山系に源を発する御笠川が、また、西縁には背振山系を源流とする那珂川が北流して博多湾に注ぎ込んでおり、その流域には両河川に因って形成された沖積地が広がっている。この平野の中央部には、牛頭や観音山の小山塊から延びる低丘陵が博多湾にむかって延々と続き、その低丘陵上には須玖岡本遺跡をはじめ那珂遺跡群や比恵遺跡群などの多くの遺跡がある。

井相田C遺跡のある福岡平野東部の御笠川流域の人跡を概観すると、その初現は、後期旧石器時代に遡る。板付遺跡や諸岡遺跡・麦野A遺跡・井尻B遺跡・笠原遺跡でナイフ形石器や台形石器・細石刃・石核などが出土している。縄文時代早期には、板付遺跡や諸岡遺跡で押型文土器や石鏃が出土しているが集落域は発見されていない。次の前期から中期にかけては、更に稀薄になり高畠遺跡や井相田D遺跡などで块状耳飾りや轟式土器片がわずかに出土しているに過ぎない。また、後期から晩期も資料的にはそう多くはなく、板付遺跡や諸岡遺跡などで鐘崎式や北久根式系の土器が出土しているが、集落域の形成は確認されていない。

弥生時代になるとその様相は一変する。板付遺跡では、早期の水田や脛を伴う用水路などが検出され、水田耕作を基盤とする集落が丘陵上に幾つも出現する。この傾向は、前期から中期に至って一段と顕著になり、御笠川の右岸では、雀居遺跡や下月隈C遺跡のほか月隈丘陵上には、宝満尾遺跡や立花寺遺跡・金隈遺跡・影ヶ浦遺跡が続いている。これに対して御笠川左岸では、麦野から板付に至る低丘陵上には中ノ原遺跡や稚隈遺跡のほかに南八幡遺跡・麦野A～C遺跡・高畠遺跡・板付遺跡などが連綿と続いている。なかでも板付遺跡は、丘陵上に環濠を巡らし、その周囲に灌漑施設を備えた水田を配した二重環濠集落で、青銅器を副葬した甕棺墓群からなる墳墓域もあり、この時期の拠点的集落と考えられる。また、この麦野丘陵の西を流れる諸岡川左岸の春日丘陵から比恵へと延びる丘陵上には、奴国王墓と考えられる須玖岡本遺跡や井尻B遺跡・五十川遺跡・那珂遺跡群・比恵遺跡群が連綿と続き、各々の遺跡からは、副葬された青銅器をはじめ、青銅製品やガラス製品の製造を示す遺物が多数検出され、この地一帯が倭国一大先進地帯であったことが窺われる。後期になると集落域は、中期のそれと同様の在り方を示すが、丘陵上の墳墓域は次第に少なくなる。これに反して、丘陵周縁の沖積地にある比恵遺跡や那珂久平遺跡・那珂君体遺跡・高畠遺跡などでは中小河川に大規模な井堰が築かれ、灌漑施設の大規模化に伴い冲積地の水田化が飛躍的に拡がる。

古墳時代になってもこの傾向は続く。前期から中期には、那珂から比恵へと続く丘陵上に福岡平野最初の前方後円墳である那珂八幡古墳のほかに板付遺跡や高畠遺跡・井相田C遺跡などで集落遺構が確認されている。後期には、丘陵上や沖積地内で更に集落域が拡がる。御笠川左岸の丘陵上では、南八幡遺跡や高畠遺跡・板付遺跡などで住居群が観られ、那珂から比恵の丘陵上には集落域のほかに東

光寺剣塚古墳などの前方後円墳や前方後方墳・円墳などの古墳が築かれている。一方、御笠川右岸には、立花寺遺跡や雀居遺跡があり、その集落構成は、堅穴住居や掘立柱建物からなり、立地的には立花寺遺跡が丘陵上、雀居遺跡が自然堤防上にある。また、墳墓域は後背する月隈丘陵に前半から後期の群集墳が集中的に構築されている。

古代になると沖積地の微高地上にも集落域が拡がり、その周縁には水田が作られる。御笠川左岸の沖積微高地上には、井相田C遺跡や仲島遺跡などの掘立柱建物を主体とする集落が現れる。これに対して那珂古川を挟んだ中位段陵上にある稚飼遺跡や南八幡遺跡・麦野A～C遺跡・高畠遺跡・那珂遺跡などで堅穴住居を主体とする集落群が現れ、中世以降も丘陵上には大小の集落が営まれ、その縁辺部の沖積地は水田可耕地と化して今日に至る。

井相田C遺跡は、御笠川左岸の低丘陵上に拡がる弥生時代から中世の複合遺跡で、これまでに13地点で発掘調査が実施されている。この井相田C遺跡を時系列的に俯瞰すると、最古の遺物は、旧石器時代に遡る。三稜尖頭器や台形石器が第1次調査区で検出されている。縄文時代の遺構は稀薄で第7次調査区で草創期の細石刃や細石核が検出されているに過ぎない。弥生時代には小規模な集落域が形成される。第3次調査区では堅穴住居や土壙が、第13次調査区では前期の堅穴住居と土壙が検出されている外に第8次調査区では条痕土器などの弥生時代前期から中期の土器や石器が出土している。

古墳時代の前～中期には、一時的に人跡は途絶える。しかしながら、後期になると第1・3～6・8・9次調査区で堅穴住居や掘立柱建物、井戸、土壙が検出されており、集落域は大きく拡大する傾向が窺える。次の古代になると集落域の展開は古墳時代後期を凌ぐ傾向にある。第1次調査区で40棟を越える掘立柱建物が、第2次調査区では官衙の性格の建物が検出されている。この外にも第4～6・9次調査区で掘立柱建物が検出されている。また、8世紀初めには、大宰府と鴻臚館を結ぶ官道が水城の東門と西門から延びているが、第1次調査区と第10次調査区では水城東門から発する東門ルートが検出されている。この東門から延びた官道は、井相田C遺跡を経て高畠遺跡、板付遺跡、那珂久平遺跡へと続いている。

中世以降は、第2次調査区で、12世紀末～13世紀初めの土壙墓から青磁碗が出土した外に15世紀後半の池跡からは曲物や漆器碗などの木製品と柿絞や卒塔婆などが検出されているが、次第に沖積地の耕地化が進んで水田と化し、その基本的景観は現代に至っている。

Tab. 1 井相田C遺跡 発掘調査一覧表

次数	調査番号	所在地	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	報告書	時代	概要	遺物
1	8502	井相田2丁目11-60	1985.6.27～ 1985.12.27	12000	152	古代	官道「水城東門ルート」、堅穴住居、掘立柱建物	台形石器・三脚火焔器、土器、石器
2	8625	井相田2丁目11-26号	1986.7.01～ 1987.10.24	11000	179	古代～中世	堅穴住居、官衙の建物を含む集落構造、土壙墓、水呑、泡	鍬形・平頭器、陶・曲げ物
3	8926	井相田2丁目2-6	1989.06.23～ 1989.09.15	650	658	弥生～古墳	堅穴住居、土壙・掘立柱建物	弥生土器、須恵器、土器類、水呑、石器
4	9539	井相田2丁目189-301一部	1995.11.06～ 1996.03.01	900	519	弥生～古代	井戸、土壙・堅穴住居・掘立柱建物	弥生土器、須恵器、土器類、水呑、石器
5	9437	井相田2丁目11-42	1995.01.11～ 1995.03.03	2249	458	古墳～古代	溝・集落、河原	河原器・土器器
6	0525	井相田1丁目17-5	2000.9.01～ 2005.06.24	134	年報20	古墳～古代	集落	
7	0608	井相田2丁目11-3	2006.04.1～ 2006.05.31	438.9	975	縄文・弥生・ 古代	溝・土壙・掘立柱建物	弥生土器・土器類、須恵器、黒色土器・絆物器
8	0703	井相田2丁目2-17	2007.04.16～ 2007.05.29	213.2	1027	古墳	井戸・土壙・難明	弥生土器・須恵器、土器類、水呑、石器
9	1040	井相田二丁目14番4、4番17	2010.02.07～ 2010.03.25	496.24	1178	古墳～古代	溝・掘立柱建物	河原器・土器器
10	1135	井相田二丁目16番4	2010.12.2～ 2011.02.03	592	1179	古代	官道「水城東門ルート」・溝	弥生土器・土器類・須恵器、黒色土器
11	1310	井相田2丁目13番7の一部、3番12	2013.06.21～ 2013.10.17～ 2013.11.22	530.9	本郷告書	古代	溝・堅穴住居・井戸	河原器・土器器・灰陶・木製品・石製品・土製品・帽子
12	1343	井相田二丁目12番6	2014.02.03～ 2014.03.17	625	本郷告書	土壙		河原器・土器器・縄石刃
13	1412	井相田二丁目12番10	2014.06.02～ 2014.08.01	411		弥生～古代	土壙・堅穴住居・掘立柱建物	河原器・土器器・弥生土器・土器類など

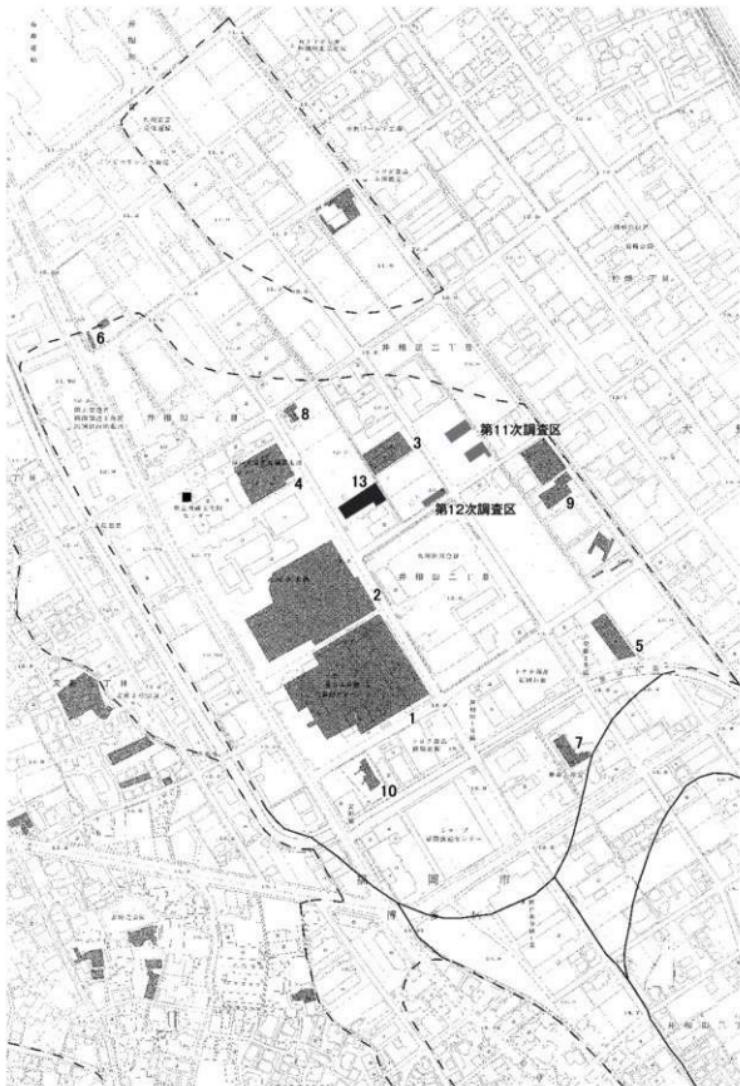


Fig. 2 井相田C遺跡位置図 (1/5,000)

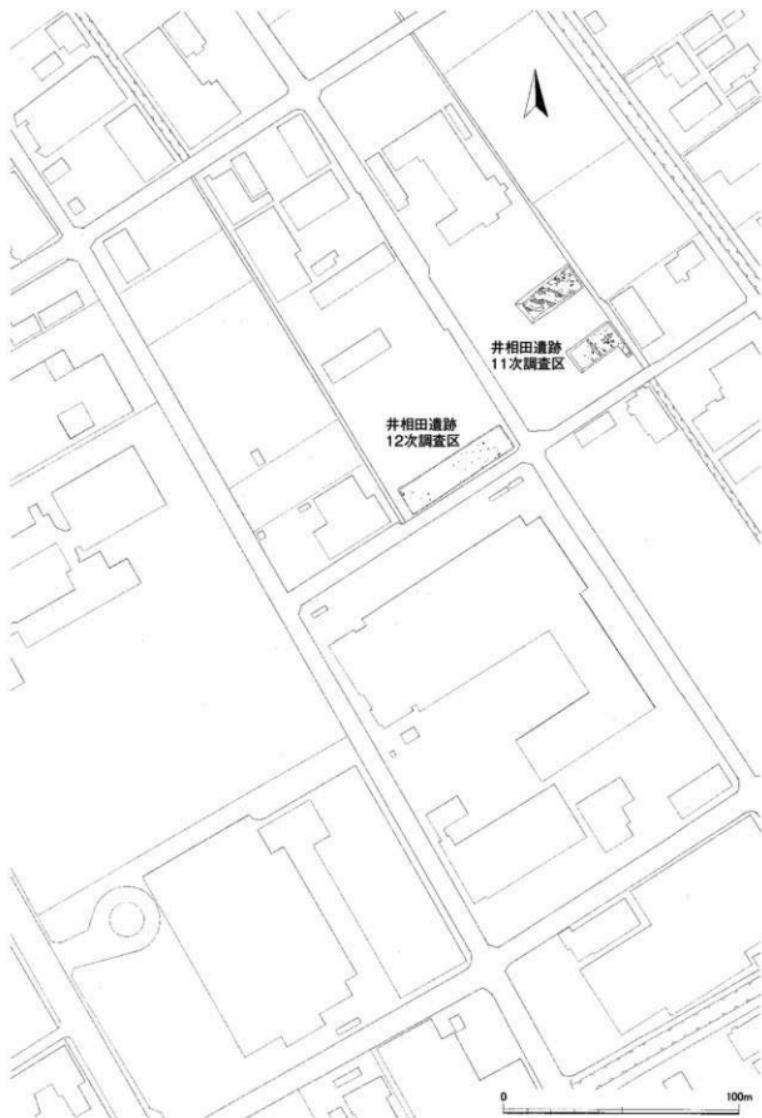


Fig. 3 井相田C遺跡第11・12次調査区位置図 (1/2,000)

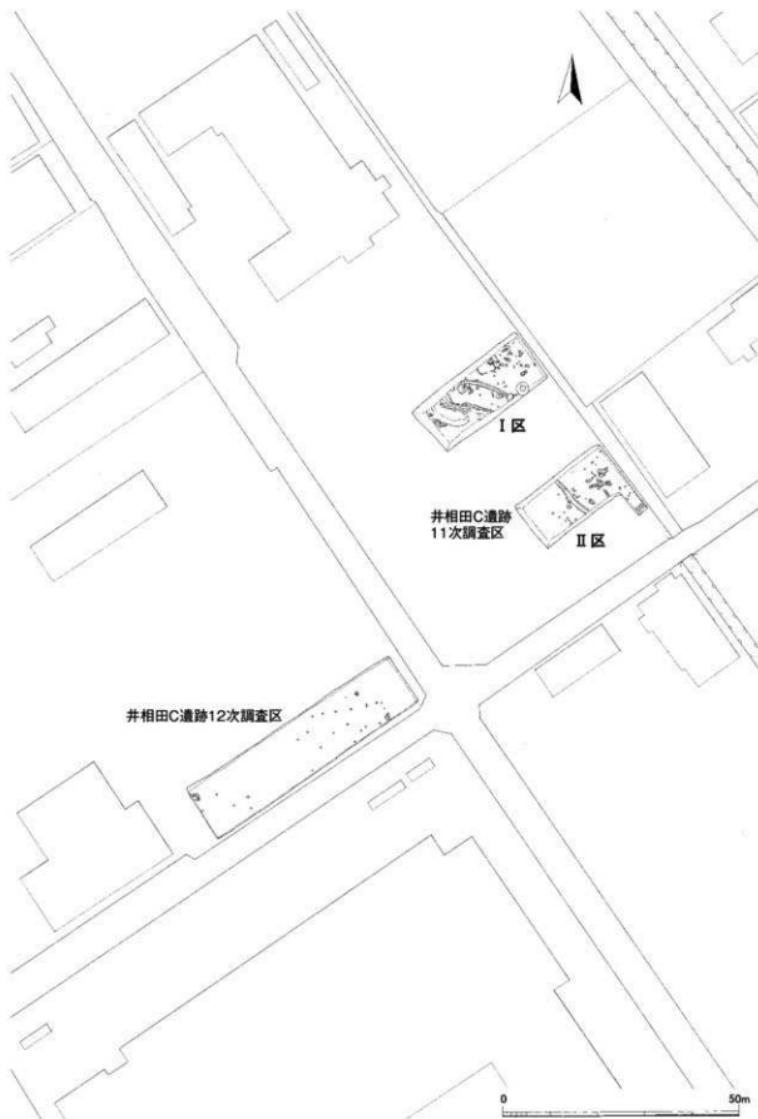


Fig. 4 井相田C遺跡第11・12次調査区周辺現況図 (1/1,000)

## II. 調査の記録

### 1. 第11次調査

#### 1) 調査の概要 (Fig. 5)

井相田C遺跡は、御笠川の左岸にあり、その西は那珂古川に因って雑餉隈丘陵と隔てられ、御笠川との間には仲島遺跡が隣接している。井相田C遺跡では、これまでに13次に亘って発掘調査が実施され、その概要是次第に明らかになりつつある。

第11次調査区は、この井相田C遺跡の北東縁に位置し、北西には第3次調査区が、また南東には第9次調査区が隣接している。試掘調査では、申請地の西半部はG L-160cmから下層が粗砂層となり、その上面に水田面が確認されたがその時期や水路等が不明なために発掘調査の対象とはならず、遺構の検出された北東部の236m<sup>2</sup>が調査範囲とされた。発掘調査は、平成25（2013）年6月10日に発掘器材の搬入とパワーショベルによる表土層の剥ぎ取り作業から開始した。現況は、道路面まで90cmほど盛土され、その下層には旧耕土面があり、G L-110cmで黒色粘質土を基盤とする沖積層を検出した。この面に竪穴住居や井戸、溝などの遺構が掘り込まれており、1号溝の南西縁では水田面が検出された。ところが、発掘調査終了間際の8月9日に、当初は未計画であった南東部にも新たな集合住宅の建設計画が申請された。この申請地は、発掘調査区の南に隣接しており、遺構の拡がりが予測されることから試掘調査を実施した結果、土壌や溝などを検出し、追加して発掘調査を実施することとなった。このために既調査区をI区、新たな調査区をII区として調査区を設定した。II区の調査は、平成25（2013）年10月17日から始め、11月22日に無事終了した。

#### 2) I区の調査

##### 1 I区の概要 (Fig. 6 PL. 1)

I区では、層厚90cmの客土層と30cmの旧耕作土下で古墳時代から古代の井戸や溝などを検出した。検出した主な遺構は、竪穴住居1棟、土壙3基、溝4条の外に多数の柱穴がある。分布的には、調

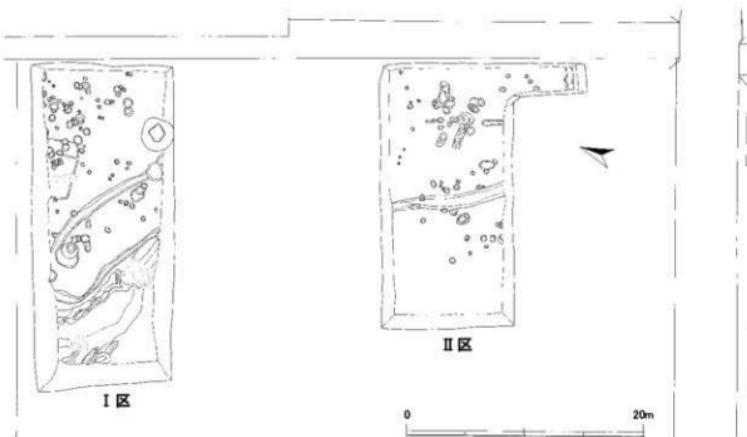


Fig. 5 第11次調査区遺構配置図 (1/400)

査区北壁の東に寄って古墳時代後期の堅穴住居1棟を、西に寄って3基の土壙を検出した。中央部から西側で4条の溝を検出した。このうち最も西に位置する1号溝は、幅広の大溝でその南西縁からは水田面が検出された。本調査区で出土した遺物の多くはこの大溝から出土したものである。一方、調査区の南東縁で平安時代の井戸が検出された。この井戸は、井側に建築部材などを転用したもので、強固に構築されていた。また、柱穴群は、調査区の中央部を南東から北西へと流れる2号溝の東側にまとまる傾向が窺えるが、建物跡としては把握できなかった。遺構の実測は、調査区の長軸に沿って任意に設定した主軸ラインを基準に10mの方眼を組み、その中に2mの小方眼を組み込み、南北から北へ1~7、西からa~mとした。

## 2 基本的層序 (Fig. 7)

井相田C遺跡は、福岡平野の東縁を北流する御笠川中流域左岸に拡がる沖積地の中に形成された微高地に立地し、近年までは一面に水田が拡がっていた。そのために礫石や砂石の混入した70~80cmの厚い客土層の下には、層厚が15~20cmの旧耕作土と薄い黄褐色粘土の床土がある。この旧耕土の下層には、灰褐色土層(4層)と灰茶色粘質土層(5層)が順に堆積しており、その層中には粗砂層やマンガン粒の沈殿層が互層的に観られ、御笠川の氾濫と修復して再耕地化を図った跡が窺われる。この灰茶色粘質土層(5層)の下には黒色粘質土層(9層)と暗灰茶色粘砂土層(13層)が堆積しており、この層が微高地の基盤層を成し、その層中に遺構が掘り込まれている。基盤層の変化は、場所によって異なり、それは沖積地内に形成された微高地の形成過程と無縁ではない。この基盤層の下には、灰黒色粘砂土層(15層)や淡灰黒色粘砂土層(23層)が堆積し、その下層は暗黄褐色~灰青褐色砂が150cmほど堆積している。その下は16号井戸の断面観察から粗砂層となり、その深さは簡易的なボーリング調査で現GLから5mの深さまで変化なく、層厚は230cm以上となる。

## 3 堅穴住居 (SC)

### 15号住居 SC-15 (Fig. 8 PL. 2)

15号住居は、調査区の北東部に位置する住居で、北半部が調査区外に拡がっており、その全容は判然としない。平面形は、東西長が470cm、南北長は東壁側で250cmを測り、一辺が470~500cmの方形プランをなそう。床面は、中央部が凹レ

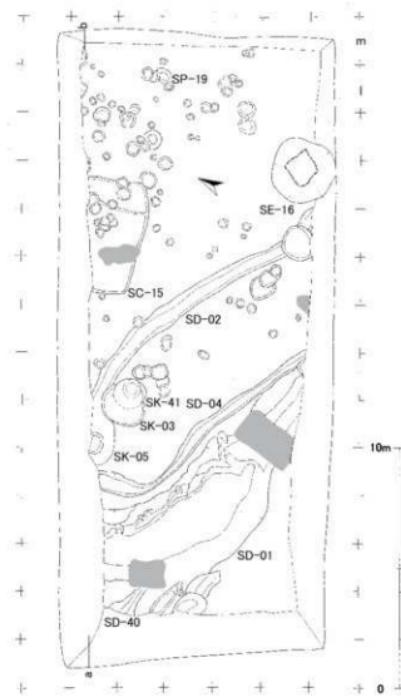


Fig. 6 II区遺構配置図 (1/200)

a H. 13.0m



Fig. 7 II区北壁土層断面実測図 (1/80)

ンズ状に浅くなり、東壁側には幅が80~105cmのベッド状のフラット面が付設されている。高さは、7~10cm。全体に削平が著しいが、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西壁側が10cm、東壁は、ベッド状遺構から6cmで床面からの高さは16cmである。主柱穴は未検出であるが、複数層の一部とベッド状遺構に沿った切合の中に主柱穴と考えられるものがあり、4本柱の可能性が考えられる。遺物は、須恵器壺や壺の外に土師器壺片が出土した。量的には少ない。

#### 4 土 壤 (SK)

##### 3号土壤 SK-03 (Fig. 9・10 PL. 2・10)

3号土壤は、調査区北壁際の中央部に位置するやや大型の土壤で、北西壁の一部は3号土壤の南東隅を切っている。土壤の南東隅には41号土壤が瓢状に張り出している。平面形は、長軸が195cm、短軸が170cmの橢円形プランをなす。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは20cmである。覆土は、濃茶～暗茶褐色土で遺物は、須恵器壺・壺・壺蓋と土師器壺片が出土した。

1は、口径が8.8cmの土師器小型鉢である。口縁部は、短く「く」字状に外反し、胴部は、長胴状に小さく膨らんで窄まる。口縁部はヨコナデ、胴部内面は押圧後にヨコナデ、外面はナデ調整。胎土は良質で、微細～細砂粒をわずかに含む。外面は淡赤橙～淡黄赤色、内面は淡明赤橙色。

##### 5号土壤 SK-05 (Fig. 9-10 PL. 2-9)

5号土壤は、I区北壁際の中央部に位置する大型土壤で、南東壁の一部は3号土壤に切られている。平面形は、直径が225cmほどの円形プランをなす。深さはおよそ20cmで、壁面はなだらかに立ち上がる。覆土は、砂粒の混入した濃灰褐色粘質土で、遺物は、須恵器壺・壺蓋と土師

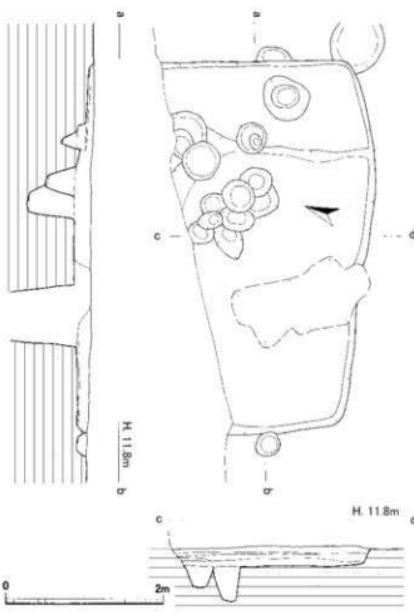


Fig. 8 15号住居実測図 (1/60)

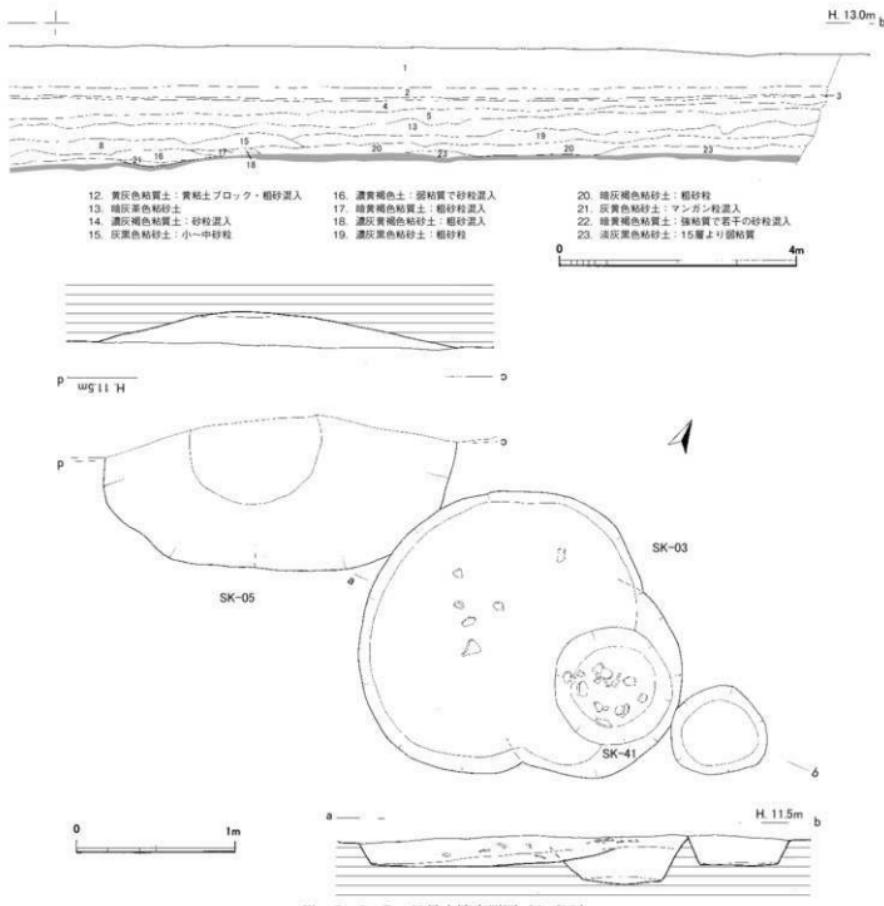


Fig. 9 3・5・41号土壤実測図（1/30）

器底片が壇底に貼付いた状態で出土したが、量的には少ない。

2は、口径が25.5cmの土師器甕である。倒卵形をなす胴部は、頸部が肥厚して窄まり、端部を丸く整えた口縁部は短く外反する。調整は、胴部外面が粗いハケ目、内面はヘラケズリ。口縁部外面は、

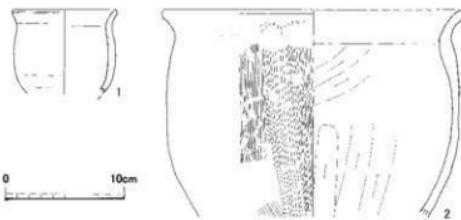


Fig. 10 3・5号土壤出土遺物実測図（1/4）

ハケ目後にヨコナデ。胎土は精良で、小～中砂粒を含み、焼成は良好。色調は橙色。

#### 41号土壙 SK-41 (Fig. 9 PL. 2)

41号土壙は、3号土壙の東隅に折り重なって位置する小土壙で、3号土壙と一体的に検出され。その前後は明らかではない。平面形は、長軸が60cm、短軸が55cmの円形プランをなす。壁面は、やや緩やかに立ち上がり、深さは25～30cm。覆土は濃茶褐色土で、検出面上には土師器片が出土した。

#### 5 井 戸 (SE)

##### 16号井戸 SE-16 (Fig. 11～16 PL. 3・4・9)

16号井戸は、調査区の南東隅に位置し、すぐ西には2号溝が南東から北東へ流れている。平面形は、南北長が280cm、東西長が270cmの不整な円形プランをなす。井戸は、地山面から120～130cmほ

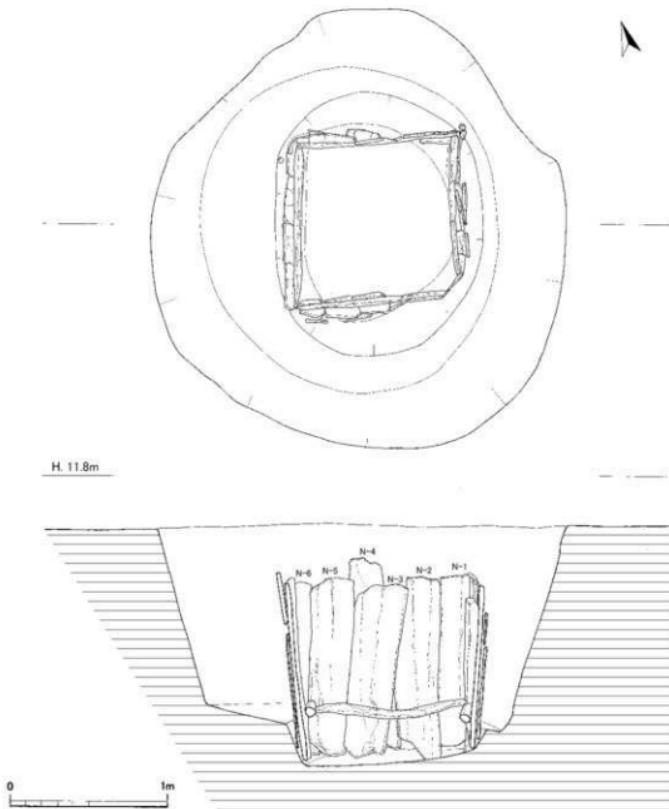


Fig. 11 16号井戸実測図 (1/30)

どほぼ垂直に掘り込み、そこから20cmほど曇央にむかって凹レンズ状に掘り込んでいる。この掘方の中央に幅が20~25cm、長さが110~125cm、厚さが3~4cmの厚い板材を概ね6枚並べて打ち込んで方形の井側を作っている。井側の外側には、小さな隙間を覆うように板材を重ねて打ち込んでいる箇所もある。この井側材の上線から30cmほど下で同様の板材を上に継ぎ足している。この井側の北西角を除くコーナーには、5~7cmの角材を添え、井戸底より30cmほど上

には、直径が10cmほどの自然木を両側から挟むようにして井側材の倒壊を防いでいる。コーナーに角材のない北西隅には、自然木の先端を割り抜いて結合し、補強を図っている。井側材の一部には、建築部材や木製品が転用されていた。井戸底までは、黒色粘質土、暗灰褐色粘砂土、褐灰色砂土、灰青色粘質土でその下は、砂~粗砂層が350cm以上堆積している。遺物は、須恵器や土師器の壺・壺・环蓋の外に土師小皿・瓦器等がある。

3は、口径が9.2~9.5cmの土師器小皿。口縁部は、体部からストレートに延び、端部は小さく上方

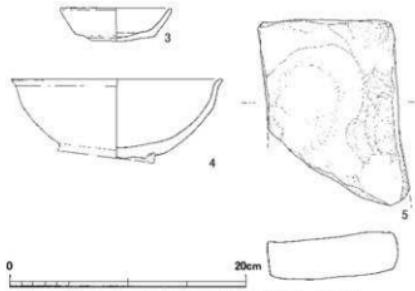


Fig. 12 16号井戸出土遺物実測図 (1/4)

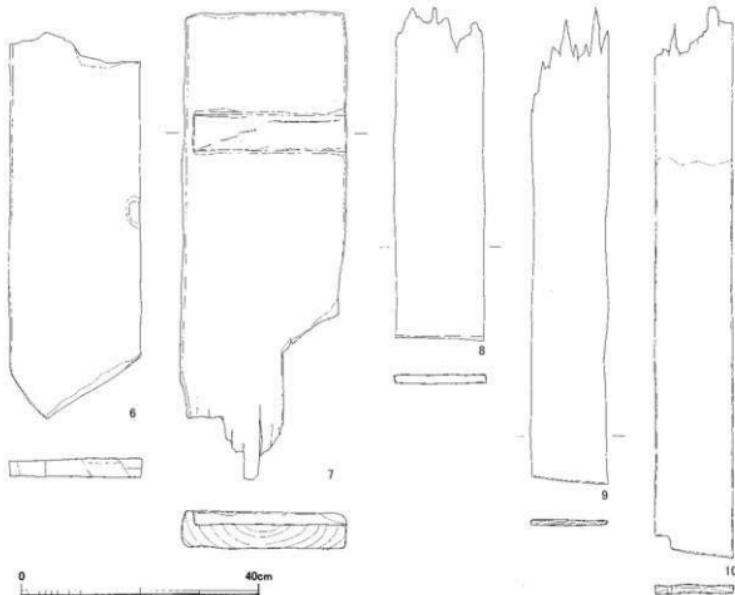


Fig. 13 16号井戸井側材実測図1 (1/8)

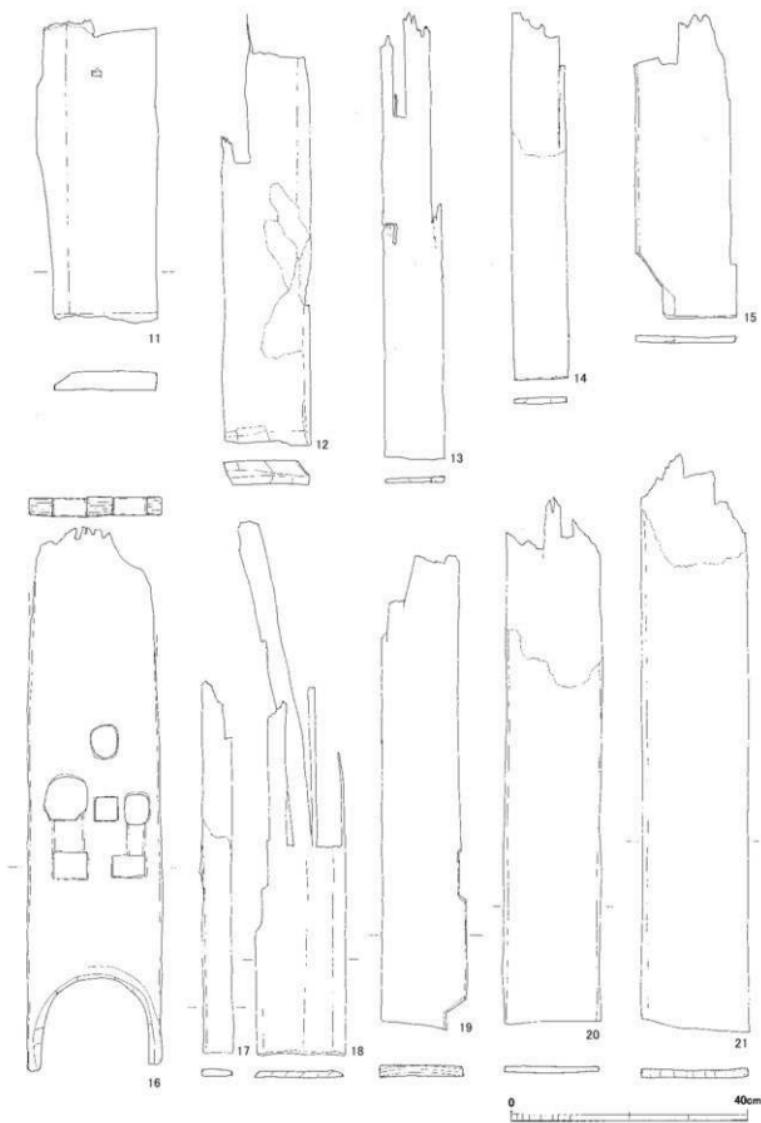


Fig. 14 16号井戸井側材実測図2 (1/8)

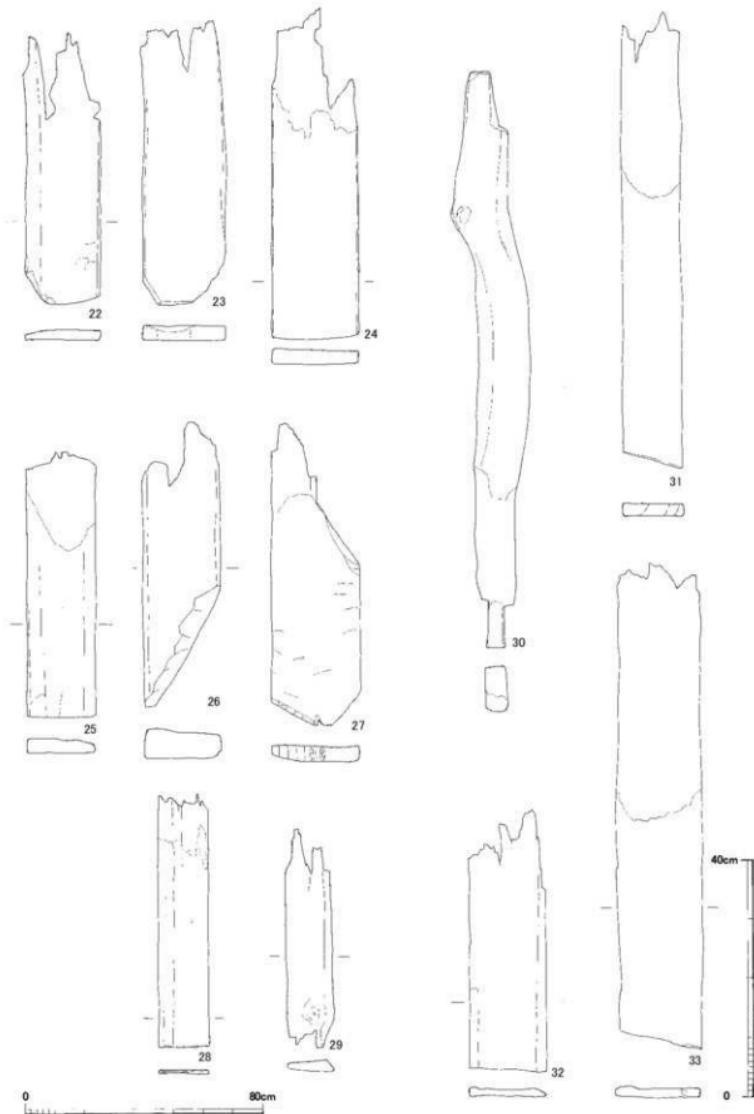


Fig. 15 16号井戸井側材実測図3 (1/8・1/16)

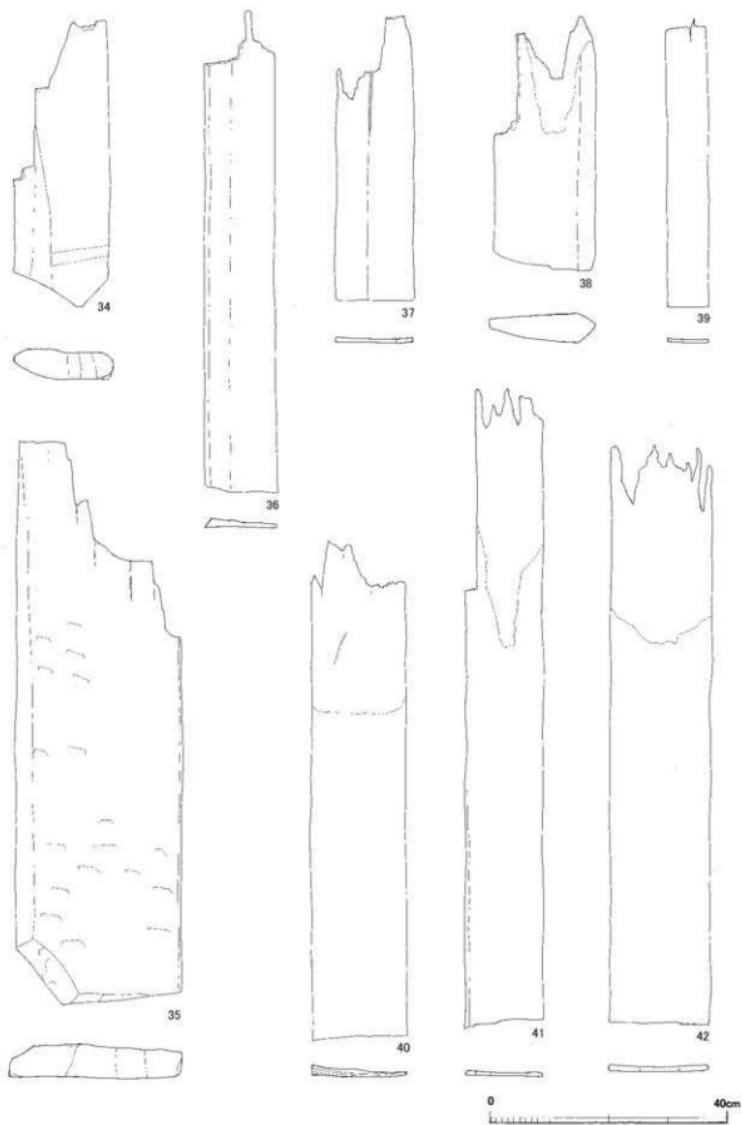


Fig. 16 16号井戸井側材実測図4 (1/8)

に摘み上げている。底部は、凹レンズ状に外底に張り出す。胎土には、細～小砂粒と赤鉄鉱塊を含む。外面は淡明赤橙色、内面は淡明黄橙～淡黃灰色。4は、口径が17.8cm、器高が5.8～6.5cmの内黒瓦器碗。半球形をなす脚部は緩やかに膨らみ、口縁部は小さく外反する。外面がヨコナデ、内面はヘラ先状工具による研磨、内底面は指頭押圧後に研磨。胎土は精良で、少量の微細～細砂粒と赤鉄鉱塊を含む。外面が淡明黄橙色、内面は黒色。5は、幅が12.3cm、現長が15.7cmの砂岩質の砥石。底面は、表面裏面と両側面の4面に観られ、表面は良く研ぎ込まれている。

6～42は、井戸枠を構成した井側材で、6～10は東、11～21は南、22～33は北、34～42は西の井側材である。井側材は、その形状から壁板材か床板材の転用品であり、木取りも板目や柾目など様々である。このうち7は、幅が27.8cm、厚さが6cm。端部には、幅が7cm、長さが26cm、深さが2cmの溝状の割り込みがあり、工具痕が残る。板目取りの広葉樹で、組合せ材の転用品である。16は、幅が22.2cm、厚さが3.5cm。先端部は、半球形に割り込み、その下に2個の長方形枘孔、2個の円形枘孔とその狭間に方形枘孔、更に方形枘孔の下に円形枘孔を穿っている。用途的には、枘孔に紐を通して、半円形の割り込みに頭部を当てる使用した背負子材であろう。針葉樹の板目取り。30は、7～10cm径の芯持ちの自然木を加工した井側材の固定枠材である。両端部は、割り込みを入れ、枘孔と組み合わせることで井側材の安定した固定を計っている。また、6・19・22・23・26・27・31・34・35には、片側あるいは両側からの削ぎ落とし痕がある。

## 6 溝 (SD)

### 1号溝 SD-01 (Fig. 17～20 Pl. 4・5・9・10)

1号溝は、調査区の西端を東から西へむかって流れる幅広な溝で、西端は弧を描くように小さく屈曲して、北方へ流れを転じる。溝幅は、北西端で4.5m、南東端で3.2mを測る。溝底のレヴェルは、南東端が11mで、緩やかな傾斜を作て1段低くなり、標高は10.7mを測る。溝西へむかって低くなり、中央部が10.55m、北端部が10.77mで、中央部が1段低くなっているが、流れとしては北流するものであろう。溝壁は、両岸とも緩やかに傾斜して立ち上がるが、東側の壁面には流水の流れ込みによる溝状の細い縱筋が溝底へむかって延びている。断面形は、上縁幅の広いU字状をなし、溝内には砂層が互層的に堆積していることから長く機能していたものと考えられる。遺物は、溝底や壁面に接して容器や編籠などの木製品と須恵器壺や环・高环などが出土した。

43～47は、須恵器壺蓋。口縁部を小さく外方に摘み出したもの（43）、直口ぎみに立ち上がるものの（44・46）と小さく内傾するもの（45）がある。また、天井部はやや平坦で中央部が小さく窪むもの（43・45）とやや丸みを帯びるもの（44・46）がある。43は、口径が13.3cm、器高は4.4cm。44は、口径が12.3cm、器高は3.5cm。45は、口径が12.5cm、器高は4cm。46は、口径は13.1cm、器高は4.4cm。47は、口径が13.1cm、器高は6cm。口縁部は、直口ぎみに立ち上がった部の内に弱い稜を形成した後に小さく内傾する。偏球状の天井部には、上縁が大きく窪む2.8cm径の摘みが付く。口径は13.1cm、器高は4.4cm。調整は、43～46の天井部がヘラケズリ、47は細かいカキ目状のヨコナデで、内天井部が押圧ナデの外はヨコナデ。43・44の天井部には、ヘラ記号が刻まれている。48～52は、須恵器环。口縁部が内傾する蓋受けから緩く屈曲して直口するもの（4・51）とストレートに内傾するもの（49・50）、短く内傾するもの（52）がある。調整は、外底面がヘラケズリ、内底面がナデの外はヨコナデ。48は、口径が12cm、器高は4.4cm。49は、口径が11.8cm、器高は4.6cm。50は、口径11.7cm、器高5.1cm。51は、口径12.1cm、器高4.3cm。52は、口径が11.3cm、器高は3.8cm。49・50の外底面にはヘラ記号がある。53～58・74は、須恵器高环。口縁部が蓋受けから内

Tab. 2 16号井戸井側材一覧表

遺物番号	出土位置	材質	木取り	長さ	幅	厚さ	備考
Fig.13	6 東側 E-2 広葉樹	板目	65+α	22	3		端部を左右から切削。加工板材の転用
Fig.13	7 東側 E-3 広葉樹	板目	80+α	27.8	6.1		仕口状の削りこみあり。
Fig.13	8 東側 渓込	針葉樹	56+α	15	1.5		加工板材
Fig.13	9 東側 渓込	針葉樹	78+α	13	0.8		加工板材
Fig.13	10 東側 渓込	針葉樹	95+α	13	1.3		端部を切削。加工板材
Fig.14	11 南側 井側 広葉樹	テナメ	52+α	20	3		そぞり穴あり。転用材
Fig.14	12 南側 芬側 針葉樹	板目	66+α	14.8	4		端部を両面から加工。加工板材
Fig.14	13 南側 渓込 針葉樹	板目	75+α	10	1		加工板材
Fig.14	14 南側 渓込 針葉樹	板目	625+α	9	1		加工板材
Fig.14	15 南側 渓込 針葉樹	板目	52+α	17	1		端部に斜めの分離線を入れて折った。加工板材
Fig.14	16 南側 渓込 針葉樹	板目	90+α	23	3.3		背負子の転用
Fig.14	17 南側 渓込 針葉樹	板目	62.5+α	5	1.5		加工板材
Fig.14	18 南側 渓込 針葉樹	板目	90+α	15	1		加工板材
Fig.14	19 南側 渓込 針葉樹	板目	80+α	14	1		側面と端部に加工あり。加工板材の転用
Fig.14	20 南側 渓込 針葉樹	板目	88+α	16	1		加工板材
Fig.14	21 南側 渓込 針葉樹	板目	97+α	18	1.2		加工板材
Fig.15	22 西側 N-1 広葉樹	板目	90+α	25.2	3.3		端部を斜めに切削。加工板材の転用
Fig.15	23 北側 N-2 広葉樹	板目	90+α	28	5.2		端部を斜めに切削。加工板材の転用
Fig.15	24 北側 N-3 針葉樹	板目	112+α	31	5		加工板材

遺物番号	出土位置	材質	木取り	長さ	幅	厚さ	備考
Fig.15	25 北側 N-4 広葉樹	板目	90+α	23.5	5		端部を斜めに切削。加工板材の転用
Fig.15	26 北側 N-5 針葉樹	ナナメ	96+α	26	10		端部を斜めに切削。加工板材の転用
Fig.15	27 西側 N-5 針葉樹	板目	102+α	30	5		端部を斜めに切削。加工板材の転用
Fig.15	28 西側 N-6 針葉樹	板目	85+α	17	1		端部を切削。加工板材
Fig.15	29 北側 N-6 針葉樹			74+α	16	4	ミカシ削材?
Fig.15	30 北側 内舟 広葉樹	芯持	98	7	10		先端を加工して尖らす。先端の転用。
Fig.15	31 西側 渓込 針葉樹	板目	77+α	10	2.2		端部を切削。加工板材
Fig.15	32 北側 渓込 針葉樹	板目	44+α	13	1.5		加工板材
Fig.15	33 北側 渓込 針葉樹	板目	82+α	14	1.5		加工板材の転用
Fig.16	34 西側 W-1 広葉樹	板目	48+α	16	5		端部を斜めに切削。加工板材の転用
Fig.16	35 西側 W-2 広葉樹	板目	94+α	28	5.5		端部を斜めに切削。加工板材の転用
Fig.16	36 西側 渓込 針葉樹	板目	82+α	12	1.5		端部を切削。加工板材
Fig.16	37 西側 渓込 針葉樹	板目	44+α	13	0.8		加工板材
Fig.16	38 西側 渓込 広葉樹			43+α	17	5	ミカシ削材
Fig.16	39 西側 渓込 針葉樹	板目	48+α	7	0.5		端部を切削。加工板材
Fig.16	40 西側 渓込 針葉樹	板目	85+α	16	1.5		端部を切削。加工板材
Fig.16	41 西側 渓込 針葉樹	板目	108+α	13	0.8		端部を切削。加工板材
Fig.16	42 西側 渓込 針葉樹	板目	97+α	17	0.8		端部を切削。加工板材

非単位はcm

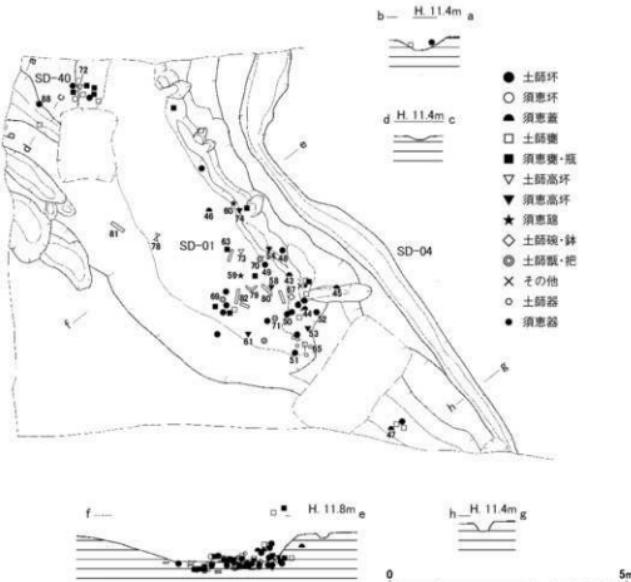


Fig. 17 1・4・40号溝実測図 (1/100)

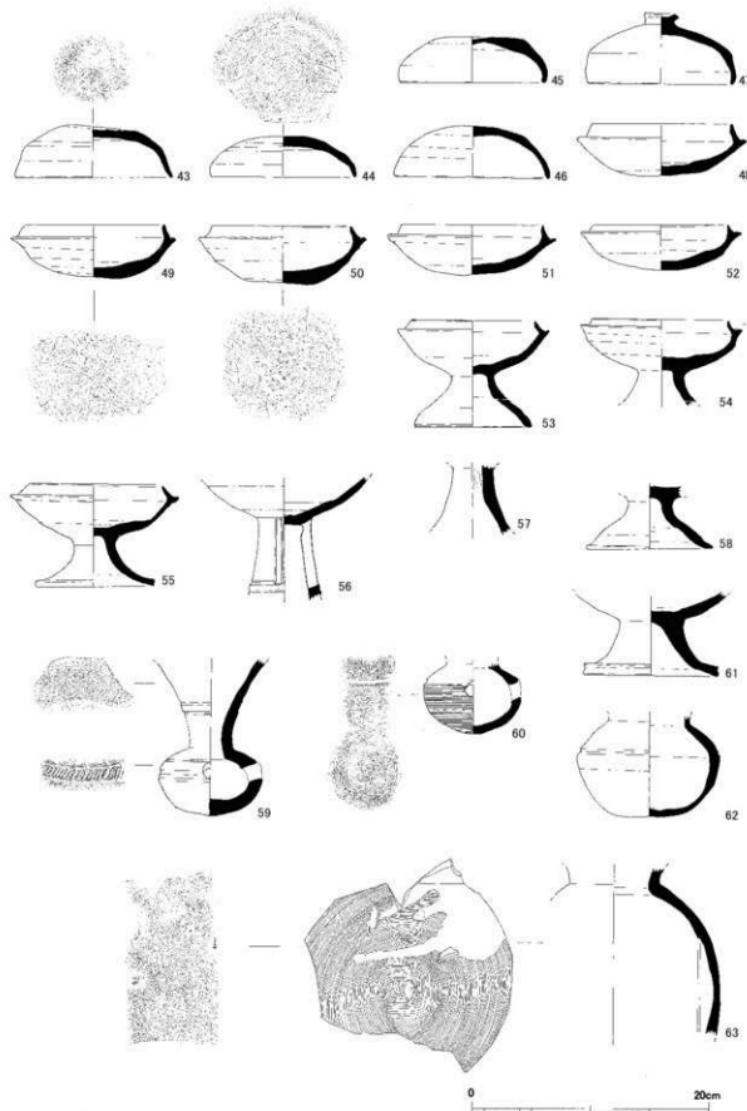


Fig. 18 1号溝出土遺物実測図1 (1/4)

傾した後に直口するもの（53・54）とストレートの内傾するもの（55）がある。また、短くラッパ状に開く脚部は、内面に緩やかな稜を作って内湾しながら開くもの（53・58）と大きく開くもの（54・55）、やや細長く開くもの（57）がある。56は、細長くのびる脚の真ん中に2条の凹線が巡り、その上には長方形の透かし孔を穿っている。胎土には微細～中砂粒を含む。53は、口径が $10.6\text{cm}$ 、脚径が $10.1\text{cm}$ 、器高は $9\text{cm}$ 。54は、口径が $11.6\text{cm}$ 。54は、口径が $11.2\text{cm}$ 、脚径が $10\text{cm}$ 、器高は $8.5\sim 8.7\text{cm}$ 。58は、脚径が $11.6\text{cm}$ 。74は、生焼けの脚で、裾径は $11.4\text{cm}$ 。脚部はラッパ状に外反し、裾部に縫

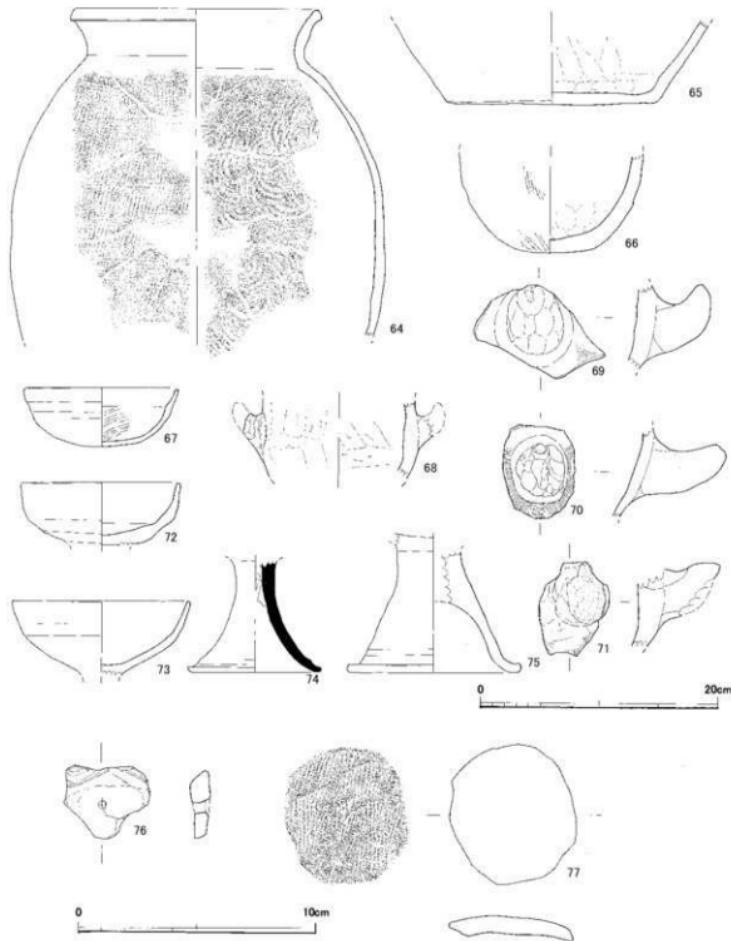


Fig. 19 1号溝出土遺物実測図2 (1/2・1/4)

やかな凸線状の稜を作つて小さく外反する。調整は、ナデで内面には捻り痕がある。胎土には微細～小砂粒と僅少の赤鉄鉱塊を含む。外面は白灰～淡明赤橙色、内面は淡明赤橙色。

59・60は、胴部は、玉葱状をなし、口縁部がラッパ状に大きく外反する須恵器甌。胴部上位に1.4cm径の円孔をナナメ下方にむかって穿つ。59は、円孔の上下と真ん中に凹線を巡らし、円孔下はヘラケズリ。60は、円孔の上縁に1条の凹線が巡り、その凹線下はカキ目。いずれも胎土は精良で、微細～小砂粒を含む。63は、須恵器瓶。胴部は、8～8.5cm径の粘土盤で塞いでいる。精良な胎土には、小～粗砂粒を含む。61は、高台径が11.6cmの台付壺。脚部は、短くラッパ状に外反し、脚根端部は小さく摘み出す。胴部外面が粗いヘラケズリ、脚部はカキ目、内面は胴部がナデ、脚部はヨコナデで脚台の接合部は押圧ナデ。精緻な胎土には細～小砂粒を含む。62は、須恵器の小型甌。胴部は肩の張った偏球形をなし、口縁部は短く直口する頸部から緩やかに外反する。肩部には1条の凹線が巡る。調整は、胴部下半がヘラケズリ、内底面が押圧ナデの外はヨコナデ。64～66は、土師器甌。64は、口径が21.2cm。口縁部は直口する頸部から緩やかに外反し、下唇を下方に小さく摘み出す。胴部は倒卵形をなす。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部外面はタタキ、内面は青海波文タタキで、形状

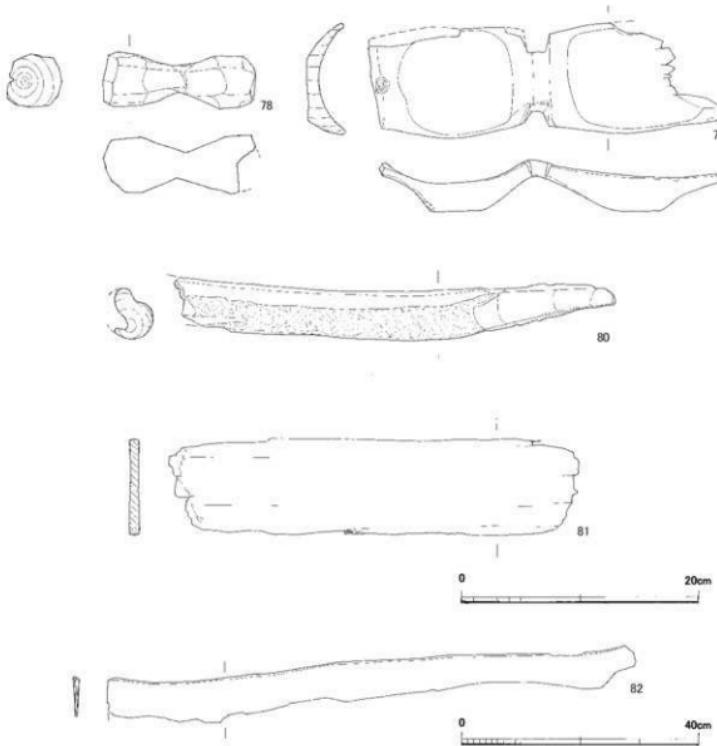


Fig. 20 1号溝出土遺物実測図3 (1/4・1/8)

や調整から生焼けの須恵器甕の可能性もある。胎土には微細～石英中砂粒を含み、胴部下半には濃い煤が付着している。外面は淡灰白褐色、内面は淡灰白～淡灰黄色。65は、底径が17.8cm。胴部は、平底の底部から内弯ぎみに立ち上がる。内底面はヨコ方向の指頭押圧ナデ、胴部内面はナメの押圧ナデ調整。胎土は粗く、石英小～粗砂粒の外に少量の雲母微細と赤鉄鉱塊を含む。66は、胴部が球形をなす丸底の土師器甕。外面は粗い搔上げ状のナデで、煤様の黒色物が付着している。胎土は粗く、細～石英粗砂粒と雲母微細を含む。外面は淡灰橙～淡灰褐色、内面は淡白黄色。67は、口径が13.1cm、器高が5cmの土師器鉢。口縁部は、扁平な体部から内面に鋭い凸線状の稜を作つて内弯ぎみに小さく外反する。体部下半はナデ、口縁部～内面は研磨状の丁寧なナデ調整。胎土は精良で、微細砂と雲母微細の外に僅少の石英小砂粒と赤鉄鉱塊を含む。68は、土師器の把手付小型甕。肉厚の胴部は、やや内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は短く外反しよう。外面は搔上げ状の粗いナデ、内面は指頭押圧後にナデ。胎土には少量の小～石英粗砂粒を含む。淡橙白色。69～71は、土師器帆把手。72・73・75は、土師器高杯。72は、口径が13.5cmで、口縁部は直口ぎみに立ち上がる。胎土には微細～小砂粒と雲母微細の外に赤鉄鉱塊をわずかに含む。淡明赤橙色。73は、口径が15cmで、口縁部はストレートに小さく外反する。胎土は粗く、微細～石英中砂粒を含む。75の脚部は、内弯ぎみに膨らみ、裾近くに緩やかな稜を作つて短く外反し、上唇を上方に摘み上げる。粗いナデ調整。胎土は、微細～小砂粒と雲母微細を含む。明赤橙色。

76は、滑石製品で、中央部に3～4mmの円孔があり、紡錘車の可能性を考えられる。77は、土師器甕片を再利用した円盤状土製品。直径は5.23～5.85cmの楕円形で、厚さは0.56～0.78cm。外面はハケ目、内面はヘラケゼリ。胎土には比較的多くの微細～小砂粒と雲母微細を含む。赤橙色の外面には被熱による赤変と煤の付着痕があり、暗黄橙色の内面には炭化物の付着痕が観られる。

78は、芯持の編錐。長さが12.8cm、幅が4.6cm、厚さは5cm。両端部は、面取りの刃物痕が残る。広葉樹材。79は、長さが30.3cm、幅が9.1～9.4cmの双子型容器。容器部は、広葉樹の柾目材を長さが9.7cmと11.5cm、幅が8.6cmと8.4cm、深さが2.3cmの大きさに削り抜く。その繋ぎ部は外縁から1.6～2cm両端から抉り込んで対称に整え、下面是3cmほど底から抉り上げている。80は、先端部を3～4段に削り落とした杭で、欠損部を除いて樹皮が残る。広葉樹芯持材。81は、現長が34.5cm、幅が7.6cm、厚さが0.8cmの粗加工した針葉樹の板材片。82は、板目の加工板材で、面取り痕が残る。

#### 2号溝 SD-02 (Fig. 21・22 PL. 5・10)

2号溝は、調査区の中央を東から西へ延びる細い溝で西端は3号土壤と重複し、それよりも古い。溝の東側は南へ小さく膨らんで弧を描くが、西側は反転して北側が膨らみながら蛇行するように延びている。溝幅は、60～95cm、深さは25～30cmで断面形は、溝底が浅い凹レンズ状をした箱形をなしている。遺物は、須恵器壺蓋や瓦器甕の外に土師器杯・皿・陶器甕片・石鍋片・土製品等が出土した。

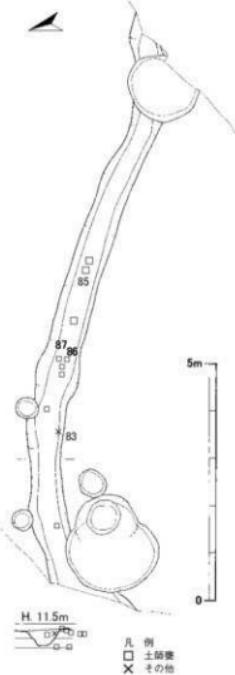


Fig. 21 2号溝実測図 (1/100)

83は、口径が5.7cm、底径が3.7cm、器高が3.1cmの手捏ねのミニチュア鉢。偏球形の体部は、内弯ぎみに外反し、口縁部は内唇を小さく摘み上げる。内面は指頭押圧ナデ、外面～外底面はナデ調整。胎土は、微細～細砂粒と雲母微細を含み、外面は黒灰～赤橙色、内面は赤橙色。84～86は土師器塊。84は、口径が10.4cm、器高は4.6cm、偏球形の体部は、ストレートに立ち上がる。口縁部～体部がヨコナデ、底部は内面が押圧ナデ、外面はナデ。精良な胎土には、少量の微細～細砂粒を含む。85は、口径が10.9cm、器高は5.8cm、口縁部は、半球形の体部から直口ぎみに立ち上がり、底部はやや尖り底状をなす。口縁部はヨコナデ、体部は内面が押圧ナデ、外面はナデ。胎土は精良で、少量の微細～小砂粒を含む。86は、口径が13cm、器高は7cm。半球形の体部は、上半がストレートに立ち上がり、口縁部は、小さく外方に摘み出す。体部外面が押圧ナデ、底面はヘラケズリ、内面はヨコナデ～指頭押圧ナデ。胎土は精良で、比較的多くの微細～小砂粒と少量の雲母微細を含む。87は、口径が15cm、器高が12cmの土師器鉢。体部はストレートに立ち上がり、頸部は内側に肥厚して緩やかな稜を作り、口縁部はその頸部から小さく外反する。口縁部がヨコナデ、胴部はナデ、内底面は指頭押圧ナデ。内面の上半部には、淡い炭化物様の黒色物が付着している。胎土は粗く、多くの微細～中砂粒と少量の雲母微細粒を含む。淡明黄褐色で、外面には被熱による淡い赤変がある。

#### 4号溝 SD-04 (Fig. 17・22 PL. 6・8)

4号溝は、調査区の西部を1号溝に添うようにして東から西へ流れる幅の狭い溝で、その西端は、1号溝と同じように緩やかに屈曲して流れを北へ転じている。状況的には、調査区外で2号溝と弧を描いて繋がる可能性もある。溝幅は、25～85cm、深さは10～24cmで溝底の凹凸によって深浅が観られる。断面形は、溝底が小さく四レンズ状に窪んだ箱形をなす。遺物は、土師器塊や須恵器片が出土した。

#### 40号溝 SD-40 (Fig. 17・22 PL. 6・8)

40号溝は、調査区の北西端にある溝で、その東端は1号溝と重なるが、攪乱層によって遮断されており、その前後関係は明確でない。溝幅は、東端が40cm、西端は110cmと急激に広くなるが、長さが120cmと短いためにその全容は定かではない。断面形は、浅い四レンズ状をなし、深さは、東端が8cm、西端は27cmでレヴェル的には1号溝から北西方へ流れ出していたと考えられる。覆土は、溝底に薄い砂層を挟んだ暗灰褐色粘質土で、遺物は、須恵器や土師器片が出土した。

88は、口径が13.8cm、器高が4.7cmの須恵器壺蓋。端部を丸く

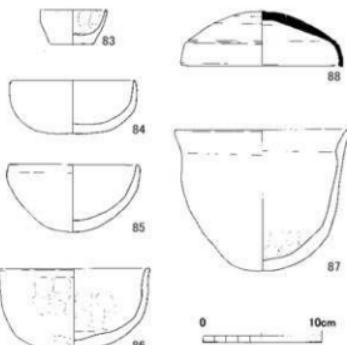


Fig. 22 2・40号溝出土遺物実測図 (1/4)

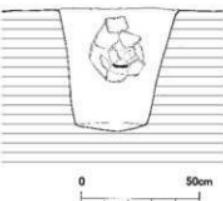
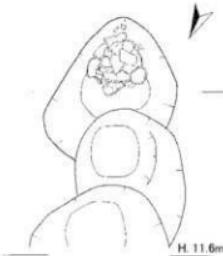


Fig. 23 19号ビット実測図 (1/20)

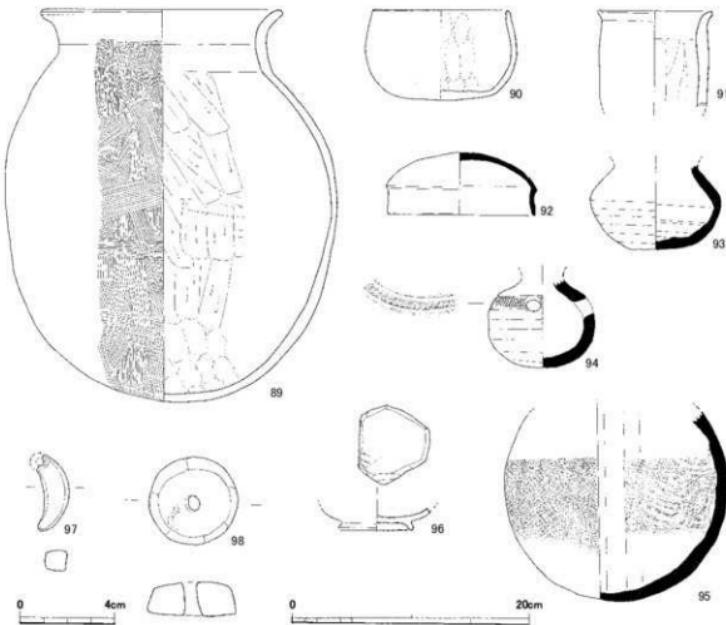


Fig. 24 ピットと包含層出土物実測図 (1/2・1/4)

仕上げた口縁部は、直口ぎみに立ち上がり、天井部との境には凹線が巡る。天井部外表面がヘラケズリ、内面は指頭押圧ナデで、体部～口縁部はヨコナデ。胎土は精良で、若干の微細～細砂粒を含む。

## 7 ピットと包含層出土の遺物

井戸や土壙のほかに多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物としてまとまるものはなかった。また、沖積地の基盤となる黒褐色粘質土層の上には灰茶褐色土が堆積しており、この層中から土師器片などがわずかに出土した。

### 19号ピット SP-19 (Fig. 23・24 PL. 5)

19号ピットは、調査区の東辺にあるピットで平面形は、長軸が62cm、短軸が46cmの楕円形プランを呈する。深さは、50cmで壁面はやや急峻に立ち上がる。ピットの南辺から壙央にむかって土師器甕が押し潰されたように投棄されていた。

89は、口径が20.4cm、器高が33.2cmの土師器甕。胴部は卵形をなし、頭部はその胴部から直口して立ち上がった後に大きく外反する。口縁部がヨコナデ、胴部は内底面が指頭押圧ナデの外は下から上へのヘラケズリ、外面は粗いハケ目、胴上半～頸部は細かいハケ目で工具の使い分けがある。良質の胎土には細～石英中砂粒と赤鉄鉱塊を含み、色調は淡明赤橙色。

### 包含層の遺物 (Fig. 23・24 PL. 5)

90は、口径が11.6cm、器高が7.7cmの土師器鉢。体部は、平底ぎみの底部から内湾して立ち上がり、

口縁部は短く直口する。体部内面は押圧ナデ、内底面は指頭押圧ナデ調整。胎土は精良で、微細～細砂粒と僅少の小砂粒・雲母微細を含む。淡明黄橙色。91は、口径が9.8cmの土師器小型壺。胸部は、ストレートに立ち上がり、口縁部は小さく外反する。口縁部がヨコナデ、胴部は粗いナデ。胎土には、微細～細砂粒と赤鉄鉱塊をわずかに含む。淡明赤橙色。92は、口径が12.5cm、器高が5.3cmの生焼けの須恵器环蓋。天井部は扁平な半球形で、口縁部は、頸部との境に緩やかな凸線状の稜を作つて小さく内傾した後に直口して立ち上がる。胎土には少量の微細～細砂粒を含み、焼成は軟質。色調はくすんだ淡黄褐色。93は、頸部径が7cmの須恵器小型壺。胸部は、玉葱状の球形をなし、底部はわずかに丸みを帯びる。胴部外面下半がヘラケズリ、内底面は指頭押圧ヨコナデ、上半部はヨコナデ。焼成は堅敏で、灰色。94は、須恵器罐。球形の胸部上半には孔径が1.4cmの円孔を外面から斜めに穿つ。この円孔の上下端に各々1条の凹線を巡らし、その間にヘラ工具による刺突文を斜めに線刻している。円孔から下がヘラケズリ、上はヨコナデ。胎土は精良で、焼成は堅敏。灰色。95は、須恵器瓶。胸部の中央は7.5cm径の粘土板で塞いでいる。96は、高台径が6.4cmの綠釉陶器碗。胎土は緻密で、色調は施釉により淡緑～淡橙色。97は、長さが2.3cm、幅が1.02cm、厚さが0.7～0.9cmの滑石製勾玉で、頭部には0.5cm径の円孔を穿っている。98は、滑石製鋤鍤車。直径が3.65～3.72cm、厚さが1～1.27cmで中央には7mm径の円孔をやや斜めに穿ち、全体によく研磨されている。

### 3) II区の調査

#### 1 II区の概要

(Fig. 25 PL. 6)

II区では、客土層と旧耕作土下で古墳時代から古代の7基の土壙と3条の溝の外に柱穴を検出した。分布的には、調査区の中央部を北流する101号溝を境にして東側に集中する傾向が窺え、101号溝より西は、124号土壙を除くと数基の柱穴しかない。検出した遺構は、101号溝を除いては全体に削平が著しく、土壤の中には不整形で浅い窪みかと思われるものもある。遺構の実測は、調査区の長軸に沿って任意に設定した主軸ラインを基準に10mの方眼を組み、その中に2mの小方眼を組み込み、南から北へ1～7、西からa～mとしたが、I区の方眼線とは一致しない。

#### 2 基本的層序 (Fig. 26)

II区の層序も北接するI区と大

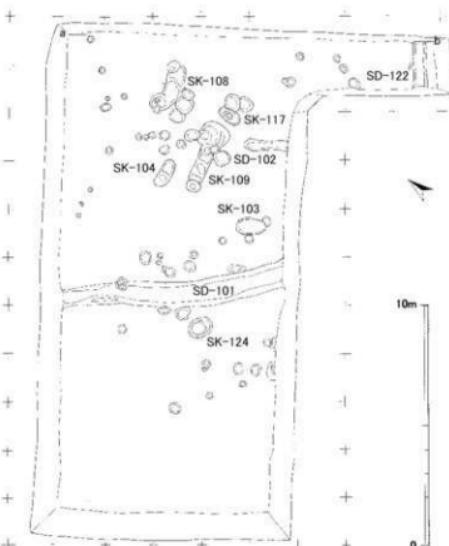


Fig. 25 II区遺構配置図 (1/200)

差がなく、30~40cmの客土層下に濃灰色土（2層）と暗灰色土（3層）の2面の旧耕作土層があり、下層の暗灰色土（3層）は北端部が消失し、その南側は濃灰色土のみとなる。同様に3層下の黄褐色土（4層）もその南側には1段高い灰褐色土（15層）がある。この黄褐色土も耕土で、それに連なる灰褐色土（15層）は畦畔の可能性がある。この重なる2~4層が平野奥の南へ行くに従って高くなる傾向は、水利上の問題であり、改修を繰り返しながら長く水田として加耕された証となる。基本的には黒色~黒褐色粘性土（22層）が基盤層となり、その層下には砂層（27層）を挟んで灰黃褐色粘性土（24層）や灰色粘性土（29層）が堆積している。しかし、場所によって若干の違いが観られることは、沖積地内に立地する微高地の形成過程に起因し、I区と何ら変わることはない。調査区南端のG L-170~190cmで確認した灰色粘性土（29層）がどのような堆積状況が明らかでないか、I区同様に御笠川の氾濫によってもたらされた砂層が続いているものと推考される。

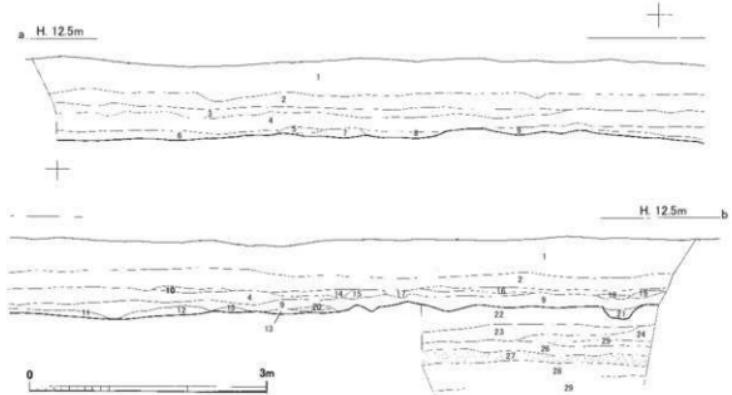
### 3 土 壤 (SK)

#### 103号土壤 SK-103 (Fig. 27 PL. 7)

103号土壤は、調査区の中央部南縁にあり、すぐ西には101号溝が北西へ流れている。平面形は、長軸が128cm、短軸が70cmの楕円形プランを呈し、N-30°Wに主軸方位をとる。壁高が13~18cmの壁面は、緩やかに立ち上がる。壙底は、浅い凹レンズ状をなし、断面形は緩やかな舟底状をなしている。覆土は、暗茶褐色土の單一層で、須恵器甕片がわずかに出土した。

#### 104号土壤 SK-104 (Fig. 27 PL. 7)

104号土壤は、調査区中央部の東寄りに位置し、すぐ南には109号土壤が並んでいる。西小口壁は、105号不整形土壤と重複し、それより新しい。平面形は、長軸が121cm、短軸が53cmの隅丸長方形



- 凡 例
1. 客土
  2. 旧耕作土1：濃灰色土
  3. 旧耕作土2：暗灰色土
  4. 黄褐色土：粗粒が混入し、下層に適物質
  5. 緑褐色土：緑褐色粘土小塊混入
  6. 細い褐色土：マンガン粒混入
  7. 黒褐色土：上層にマンガン粒混入
  8. 黄褐色土：暗茶褐色粒混入
  9. 黄褐色混砂土：暗茶褐色粒混入
  10. 緑褐色土：マンガン粒混入
  11. 濃灰色土：上層に緑褐色合粒混入、粗粒質
  12. 黑褐色土：11層と似層
  13. 黄褐色粘性土：12層より葉色強い
  14. 黄褐色土：マンガン粒少量混入
  15. 黄褐色粗粒土：やや茶色濃い
  16. 黄褐色粗粒土：やや茶色濃い
  17. 黄褐色土：マンガン粒少量混入、14層と類似
  18. 黄褐色土：マンガニ粒が帯状に沈殿
  19. 黄褐色粗砂土
  20. 黄褐色土：厚褐色土小ブロック混入
  21. 黄褐色土：ブロウタク状の褐褐色混入、SD-72埋土
  22. 黑色細粒土
  23. 黄褐色粗砂土：強粘質
  24. 黄褐色粗砂土：強粘質、砂粒多混
  25. 黑褐色土
  26. 雪灰色黄褐色砂土：粗砂層に灰土混入
  27. 黄褐色粗砂土
  28. 黄褐色粘性土
  29. 灰色粘質土：シルト質粘土

Fig. 26 II区東壁土層断面実測図 (1/60)

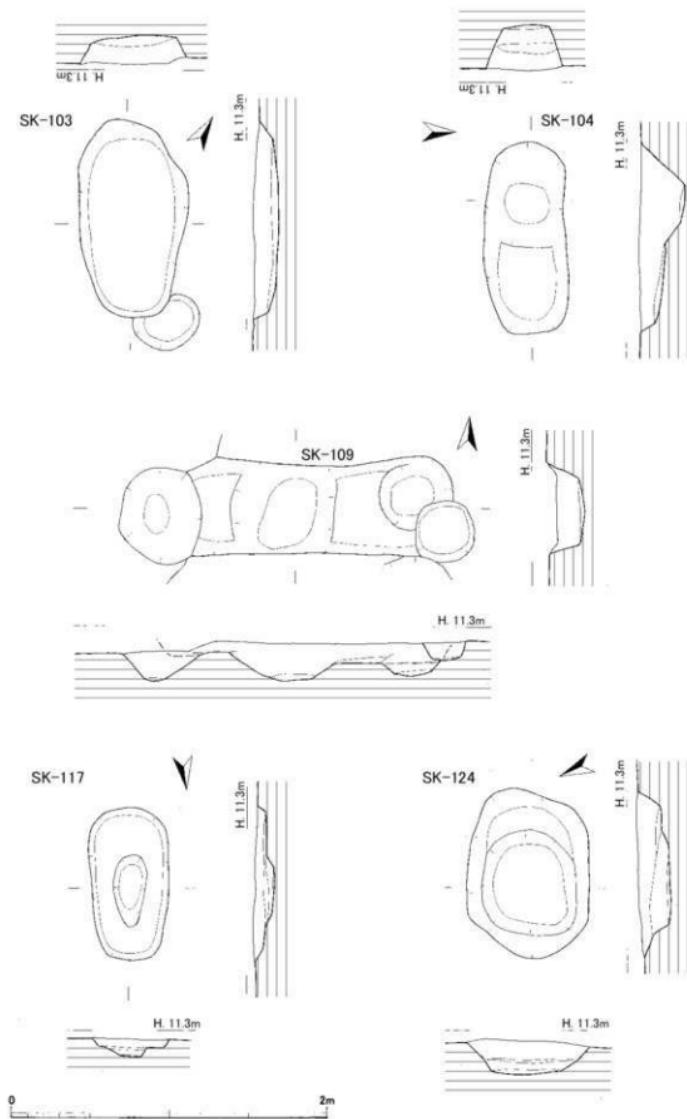


Fig. 27 103・104・109・117・124号土壤実測図 (1/30)

プランを呈し、主軸方位はN-88°-W。床面は、東小口側にフラット面を作った後に西小口壁にむかって10cmほど掘り込んだ2段掘りの構造をなす。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は、東小口壁側で14cm、西小口壁側で28cmを測る。覆土は、茶褐色～暗茶褐色土。遺物は、土師器壺片がわずかに出土した。

#### 108号土壙 SK-108 (Fig. 25 PL. 6)

108号土壙は、調査区の北東部に位置するや

や不整形な土壙で、すぐ南には117号土壙がある。小口壁はいずれもビットに切られているが、主軸方位をN-72.5°-Eにとる短軸が80cmの長方形プランを呈し、長軸は175cmになろうか。壙底には、中央より東壁側にフラット面を作り、そこから更に西壁側に15cmほど掘り込む2段掘りの構造をなす。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は、1段目の東側で10cm、2段目の西側は21cm。覆土は、暗茶～黒茶褐色土で、土師器片がわずかに出土した。

#### 109号土壙 SK-109 (Fig. 27 PL. 6)

109号土壙は、調査区の東部に位置し、すぐ北には104号土壙がある。両小口壁は56・60号ビットに切られているが、平面形は、短軸が60cmの長方形プランで、長軸は170cmになろう。主軸方位は、N-85°-E。やや緩やかに立ち上がる壁面は、深さが7～15cmで、壙央には深さが12cmのビット状の掘り込みがある。覆土は、茶～暗茶褐色土の單一層で、須恵器壺や土師器壺片がわずかに出土した。

#### 117号土壙 SK-117 (Fig. 27・28 PL. 7)

117号土壙は、調査区の南東部に位置する小土壙で、周囲を108号土壙や113・119号不整形土壙、102号溝に囲まれている。平面形は、長軸が97cm、短軸が50cmの楕円形状の隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-5°-Eにとる。壁面は、緩やかに立ち上がり、深さは11cmを測る。床面は、浅い凹レンズ状をなすが、壙央には長軸が45cm、短軸が21cm、深さが5cmの小さな楕円形の掘り込みがある。覆土は、暗茶褐色土の單一層で、須恵器壺や壺の外に土師器壺がわずかに出土した。

99は、高台径が7.5cmの須恵器壺。薄い体部はストレートに立ち上がり、短い高台は外唇を小さく摘み出す。底面がナデ、体部はヨコナデ。胎土は精良で、微細～細砂粒をわずかに含む。外面は灰色、内面は灰～黒灰色。

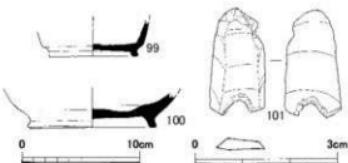


Fig. 28 117・119号土壙出土遺物実測図  
(1/1・1/4)

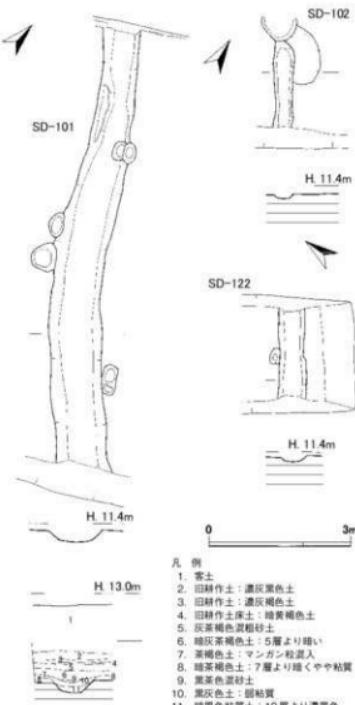


Fig. 29 101・102・122号溝実測図 (1/100)

### 119号土壤 SK-119 (Fig. 26・28 PL. 6・10)

119号土壤は、調査区東壁際の中央で検出した不整な浅い窪み状の土壤である。平面形的には、短軸が280cm、長軸が350cmほどになろう。深さは10~17cmと浅く、断面形も緩やかな掘鉢状をなしている。覆土は、暗茶褐色~黒茶褐色土の単一層で、須恵器甕や土師器片がわずかに出土した。

100は、高台径が10.9cmの須恵器甕。体部は内弯ぎみに立ち上がり、やや高い高台は内外唇を丸く整える。内底面の中央がナデの外はヨコナデ。胎土は精良で、微細~細砂粒をわずかに含む。101は、現長が2.3cm、基部幅が1.3cmの黒曜石製片鎌で、上下端は捻れて折れている。

### 124号土壤 SK-124 (Fig. 27 PL. 8)

124号土壤は、調査区東縁に位置する。平面形は、長軸が105cm、短軸が79cmの卵円長方形プランを呈し、主軸方位はN-65.5°-W。壁面は、深さが20cm。東壁下には、幅が15cmほどの半月形をしたフラット面がある。一方、東壁を除く壁面は、なだらかに掘り込んだ後に屈曲面を作つて壙底へと急峻に窄まる。壙底は、浅い凹レンズ状をなす。遺物は土師器片がわずかに出土した。

## 4 溝 (SD)

### 101号溝 SD-101 (Fig. 29・30 PL. 8・10)

101号溝は、調査区の中央部を北西に延びる溝で、現長は9.1m。東岸には103号土壤が、西岸には124号土壤がある。溝幅は70~107cm、深さは25~48cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、西岸の北部には小さなフラット面がある。断面形は、浅い舟底状をなしている。溝底のレヴェルは、北端が10.88m、中央部は最深部が10.76m、最高部が10.9mと凹凸があり、南端は10.85mでほぼフラットであるが、地形的にI区にむかって北流した溝と考えられる。覆土は、上層に黒茶色の混砂土が薄く堆積し、その下に弱粘質の黒灰色土と暗黑色粘質土が凹レンズ状に堆積していた。溝中からは、須恵器甕の完形品のほかに須恵器甕や土師器甕・甕片が出土した。

102・103は、須恵器甕。体部は扁平な球形をなし、口縁部は蓋受けからストレートに内傾して立ち上がる。外底面はヘラケズリ、内底面がナデの外はヨコナデ。胎土は、微細~小砂粒と雲母微細を含む。灰~灰紫色。102は、口径が10.9cm、器高が3.8cm。103は、口径が11.2cm、器高は3.7cm。102の外底面には「キ」、103の外底面には「一」印のヘラ記号が線刻されている。104は、口径が18.8cm、器高が4.5cmの土師器皿。体部は内弯ぎみに小さく膨らみ、底部は凹レンズ状をなしている。胎土は精良で、微細砂と赤鉄鉱塊をわずかに含み、淡明赤橙色。105は、土師器甕の把手。106は、直径が3.67~3.77cm、厚さが1.3~1.5cmの滑石製鋤鍤。中央部には、孔径が0.45~0.5cmの円孔が上から下へやや斜めに穿たれている。仕上げの研磨は粗い。

### 102号溝 SD-102 (Fig. 29 PL. 6)

102号溝は、調査区南縁の東寄りにある溝幅が38cm、深さが10cmの短小な浅い溝で、長さは

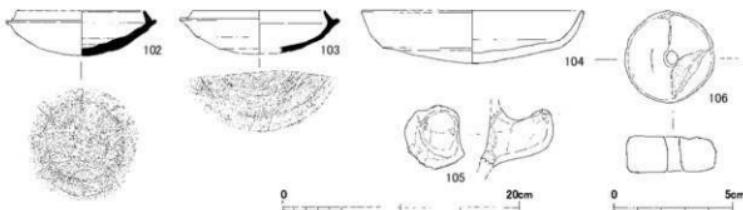


Fig. 30 101号溝出土遺物実測図 (1/2・1/4)

190cm+ $\alpha$ である。覆土は、暗茶～黒茶褐色土の単一層で、須恵器甕片等がわずかに出土した。

#### 122号溝 SD-122 (Fig. 29 PL. 8)

122号溝は、調査区の東南縁を東西流する幅が56cm、深さが16cmの溝である。現長は185cmで、状況的に俯瞰するとそのまま西へ延びた後に北へ屈曲して102号溝に繋がる可能性も考えられる。覆土は102号溝と大差のない暗茶褐色～黒色土の単一層である。

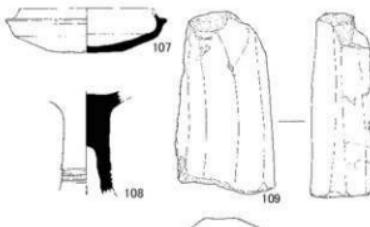


Fig. 31 包含層出土遺物実測図 (1/4)

#### 5 包含層出土の遺物 (Fig. 31 PL. 6・10)

II区では、土壤や溝の外に柱穴を検出したが、

掘立柱建物としてはまとまらなかった。また、基盤の黒褐色粘質土層上には灰茶褐色土が堆積し、この層中から土師器片などの遺物がわずかに出土した。

107は、須恵器杯で、復原口径が11.4cm、器高は3.7cm。扁平な体部は、上縁に緩やかな屈曲面を作つて蓋受けにむかってストレートにのびる。口縁部は、その蓋受けから内傾して立ち上がる。調整は、外底面がヘラケズリ、内底面がナデの外はヨコナデ。胎土には、微細～細砂粒と若干量の石英小～中砂粒を含む。焼成は堅緻。色調は淡明赤紫色。108は、須恵器高杯の脚。細い脚部は、裾近くでラッパ状に開き、その変換点に3条の凹線が巡る。胎土には、比較的多くの微細～石英小砂粒を含み、焼成は堅緻。灰色。109は、現長が15.3cm、幅は羽口部が6.9cm、基部は8.6cmの輪の羽口で11～12面に面取されている。胎土は精良で、微細～細砂粒と雲母粒をわずかに含む。淡明黄橙色。

#### 4) 小 結

第12次調査は、古墳時代後期から古代前半の竪穴住居や土壤、溝の外に柱穴を検出した。しかし、狭小な調査範囲では、その成果が直ちに遺跡の性格や機能を物語っているとは云い得ないが、その成果を勘案して今後の参考とした。

検出した遺構は、竪穴住居や土壤などの集落域を構成するもので、墳墓は未検出である。分布的にはI区に比較的まとまって拡がり、II区では稀薄になる傾向が窺える。時期的には、概ね古墳時代後期と奈良時代、平安時代初めの3期に区分されよう。古墳時代後期のものは、竪穴住居と溝およびまとめてなかつたが掘立柱建物の柱穴によって構成される。このうちI区の幅広い1号溝は、II区では検出されず両調査区の間を蛇行するように延びる。同期の竪穴住居と対比すると掘立柱建物を伴う集落域の結界を示しているかとも考えられる。また、I区の2号溝と4号溝は北壁外で弧状に繋がる可能性がある。また、II区の101号溝と122号溝は矩形の繋がりが想起される。加えてI区の4号溝は、II区の101号溝と連続する可能性が高い。これを連続的に結ぶと小溝ながら一定の拡がりをもった区画と成り得る。ただし、1号溝と4号溝は、調査区間の空白域で交差して時期差が生じるが、現状ではその機能や性格は明らかにはし得なかった。次に、16号井戸は、平安時代初めのもので井側に壁材や床板材を転用して構築したものである。この期の遺構は井戸だけであるが、その周辺域に井戸を必要とする高床の建物を主体とした集落域があったことが十分に想起される。いずれにしても現状だけでは即断しがたい課題が多く、今後の調査例の増加を待つて総合的に検討したい。

## 2. 第12次調査

### 1) 調査の概要 (Fig. 33 PL. II)

井相田C遺跡は、御笠川中流域の左岸に形成された微高地上にあり、その西縁は那珂古川に因って画され、東縁には仲島遺跡が拡がっている。

第12次調査区は、この井相田C遺跡の北東縁に位置し、北には第3次調査区が、また東には第11次調査区が隣接している。申請地の現況は水田可耕地で、試掘調査の結果、水田耕作土下80cmで黄褐色粘質土の基盤層となり、柱穴が掘り込まれていた。この遺構の検出状況から微高地上に形成された集落域の拡がりが予測された。その結果、建築物の基礎工事範囲604m<sup>2</sup>が発掘調査の対象とされた。

発掘調査は、平成26（2014）年2月3日に発掘器材を搬入して開始したが、排土を申請地内で仮置きする都合上、東西に2分割して実施することが不可欠となり、東側からパワーショベルによる表土層の剥ぎ取り作業を始めた。その後、東側の調査終了に伴い西側に仮置きした排土を東側に迂回して埋め戻して西側の調査を行った。その結果、3基の土壙と柱穴群を検出した。分布的には、やや東側に偏る傾向が窺えるが密度的には散漫な状況を呈している。遺構のうち柱穴は、ひとつの孤立柱建物としてまとまるものはなかった。ただ東西に列状に並ぶ柱穴もあるが、その浅さなどから遺構としてはまとめ得なかった。また、遺構の実測は、調査区の長軸に沿って任意の基準ラインを設定し、その基準ラインに10mの方眼枠を組み、その10m枠の中に2mの小方眼を組み込んで長軸に沿った東西に1~27、短軸に沿った南北にa~gの記号を付して1/20でを行い、土壙は、1/10で行った。発掘調査中は、冬季特有のぐずついた雨天が続いて調査の進行を妨げたが、地権者や施工業者、調査従事者の協力を得て平成26（2014）年3月17日に無事終了した。

#### 1 基本的層序

第12次調査区の現況は、水田で道路面より-50cmほど低い。床土を含む現耕作土層が20cmの厚さであり、水田耕作土より-60cmで暗褐色～黒褐色土層になる。この層厚が20cmほどの暗褐色

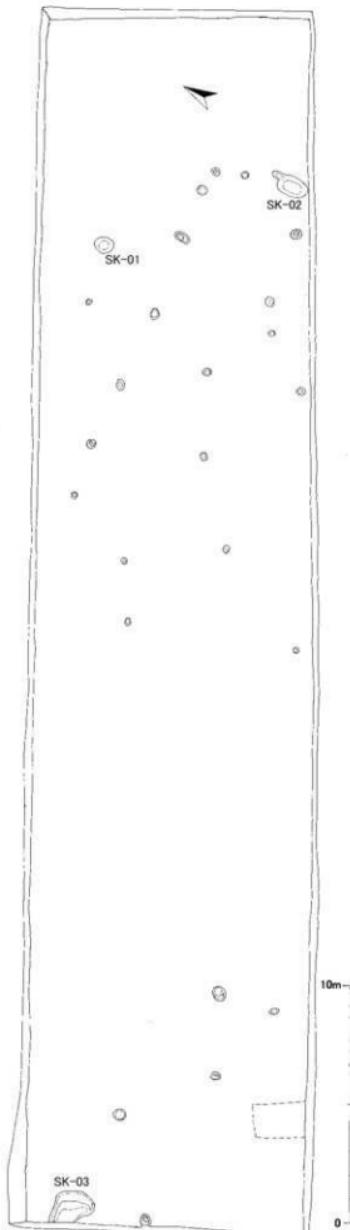


Fig. 32 第12次調査区遺構配置図 (1/200)

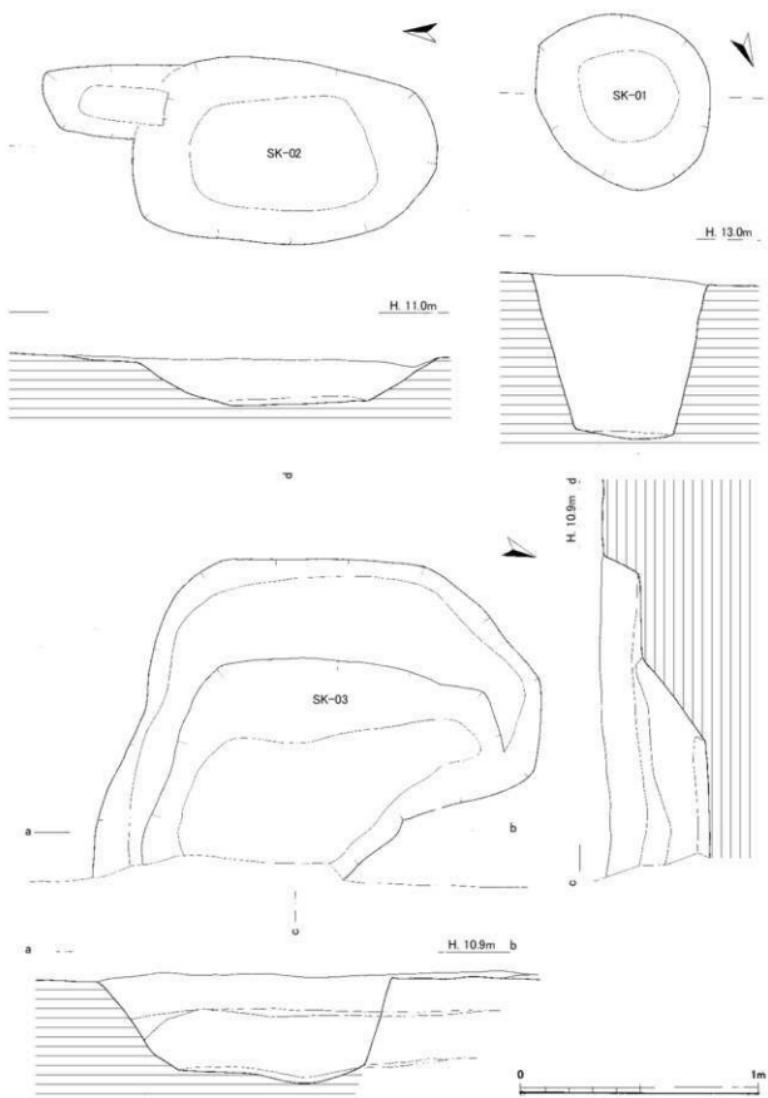


Fig. 33 1~3号土壤実測図 (1/20)

色～黒褐色土層は、層中に土師器小皿などを含んでいる。内包する遺物から中世の旧耕土と考えられる。この暗褐灰色～黒褐色土層の下層が黄褐色粘質土の鳥栖ローム層となり、この基盤層となる鳥栖ローム層に柱穴などが掘り込まれている。また、現耕作土から中世の耕作土の間の40cmほどの層中には、互層的に堆積した暗灰色～暗黒灰色粘質土があり、中世から現代に至るまで耕土の嵩上げを繰り返しながら可耕され続けたことが窺われる。

## 2 土 壤 (SK)

### 1号土壤 SK-01 (Fig. 34 PL. 12)

1号土壤は、調査区の北東部に位置する小土壤で、7m南には2号土壤がある。平面形は、直径が73cmの円形プランを呈する。深さが69cm壁面は、壇底に向かって急峻に窄まり、断面形は逆台形をなしている。壇底は、中央部が浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、黒色粘質土の單一層で、遺物は1点も出土せず開削時期は判然としない。

### 2号土壤 SK-02 (Fig. 34 PL. 12)

2号土壤は、調査区の南東部に位置する。平面形は、南北長が128cm、東西長が80cmの橢円形状の長方形プランを呈し、N-2.5°-Eに主軸方位をとる。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は22cmを測る。壇底は、浅く凹レンズ状に窪み、断面形は緩やかな逆台形をなしている。北東隅壁には、幅が31cm、深さが13cmほどの小さな溝状のピットが重複し、階段状の一体な遺構の如き趣がある。覆土は、砂粒混じりの暗茶褐色土の單一層で、遺物は1点も出土せず開削時期は判然としない。

### 3号土壤 SK-03 (Fig. 34 PL. 12)

3号土壤は、調査区の中央部に位置する土壤で、西半部は調査区外に拡がっている。平面形は、南北長が165cm、東西長が110cmで、西壁の北小口壁側は、西へ向かってのびる不整形を呈しており、L字状のプランをなす可能性が考えられる。壁面は、緩やかに立ち上がるが、東壁と北壁側は一旦15～17cmの深さまで掘り込んだ後に壇底に向かって窄まるL字状の2段掘り構造をなしている。フラット面の幅は、東壁側が35cm、北壁側は7～15cmとやや細い。壇底は、浅い凹レンズ状をなし、断面形はやや歪な逆台形をなしている。覆土は、やや粗砂粒を多く含んだ暗茶褐色混砂土の單一層で、遺物は、土師器片がわずかに出土した。

## 3 包含層出土の遺物 (Fig. 35 PL. 12)

本調査では、3基の土壤とピットを検出した。そのうちピットは、比較的浅いものが多く、調査区全体が大きく削平されていることが窺われる。そのため遺物の出土は、きわめて少なかった。

1は、長さが2.4cm、幅が0.35～0.4cm、厚さが0.2cmの黒曜石製細石刃である。断面形は概ね二等辺三角形状をなし、上縁には頭部調整かと思われる線状の打面がある。重さは、0.2g。

## 2) 小 結

第12次調査では、3基の土壤と柱穴を検出した。土壤の平面プランは、円形・長方形・不整形と様々であり、遺物も未出土なためにその時期や機能は明らかではない。しかし、未報告ながら平成26（2014）年に発掘調査された第13次調査区が西に接しており、そこでは古墳時代から古代の堅穴住居や土壤などが検出されている。このことを勘案すれば、本調査区の西に南北に長くのびる低丘陵の上に展開する該期の集落域の縁辺に拡がる土壤や柱穴群と考えられよう。

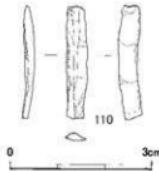


Fig. 34  
包含層出土遺物実測図  
(1/1)

### III. おわりに

御笠川中流域の左岸に拡がる井相田C遺跡は、麦野丘陵から派生した低丘陵上に南北に長くのびて拡がる弥生時代から中世の複合遺跡である。この広大な面積を有する遺跡の中において第11次調査区や第12次調査区の調査成果では、遺跡に占める全体像を明らかにする事は難しい。

第11次調査では、古墳時代後期の竪穴住居や土壙・溝と平安時代初めの井戸1基や土壙のほかに柱穴を検出した。層序的には、御笠川の氾濫によって形成された沖積地の微高地に立地していることが明らかで、このことは東に拡がっている仲島遺跡でも同様のことが報告されている。また、本調査区の西側は砂層等が堆積した谷部が拡がっていると試掘調査で報告されている。これに対して土壙や柱穴を検出した第12次調査では、鳥栖ローム層を基盤とする面に遺構が掘り込まれている。この鳥栖ローム層上に立地する竪穴住居や掘立柱建物・土壙などの集落域は西の第1~6次でも報告されており、第12次調査区は、この低丘陵上に拡がる集落域の縁辺部と考えられる。更に、第12次調査区の北に隣接する第3次調査区では、調査区の東端が谷状に落ちていくと報告されている。これらを勘案すると、第12次調査区や第3・13次調査区は、鳥栖ローム層上に立地する井相田C遺跡の東縁に立地することが云える。これに対して第11次調査区は、沖積地の微高地に立地するもので前者との間には谷状の自然流路があり、これによって両者は画されていたと考えるのが合理的と思われる。換言すれば、第12次調査区は、井相田C遺跡に含まれ、第11次調査区は仲島遺跡の西縁に位置するものと云えようか。ただし、これは飽くまでも私考であり、周辺域の調査成果をまって改めて検討したい。

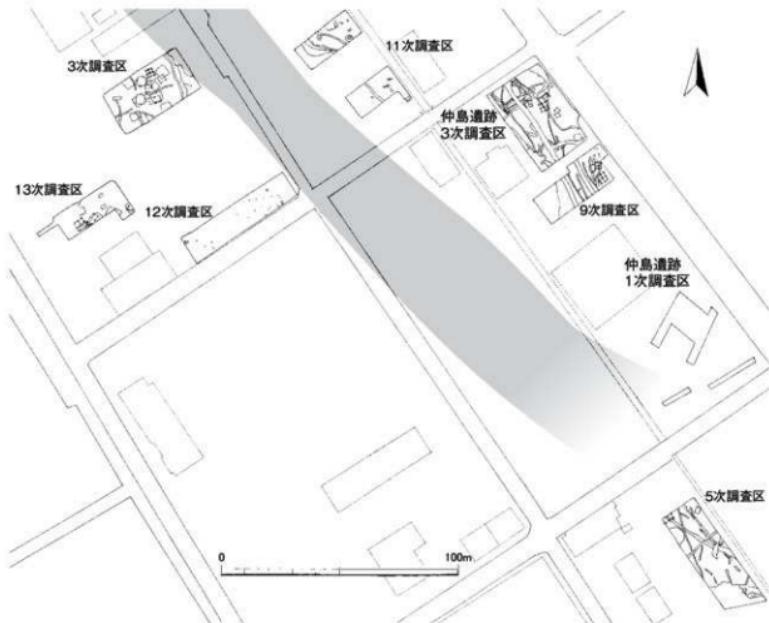


Fig. 35 第11・12次調査区周辺図 (1/2,000)

PLATE



1) 第11次調査区 I 区全景（南から） CG合成



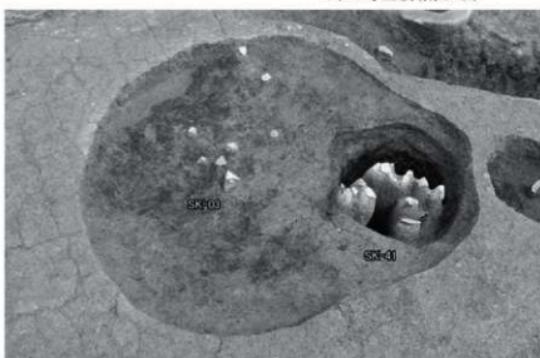
2) 第11次調査区 I 区全景（西から） CG合成



1) 15号住居（北から）



2) 5号土壤(南から)



3) 3・41号土壤(南から)



1) 16号井戸(西から)



2) 16号井戸井側(西から)



3) 16号井戸井側断面(南から)



1) 16号井戸断面(南から)



2) 1号溝(西から)



3) 1号溝遺物出土状況(南から)



1) 1号溝遺物出土状況(南から)



2) 2号溝遺物出土状況(南から)



3) 19号ピット遺物出土状況(北から)



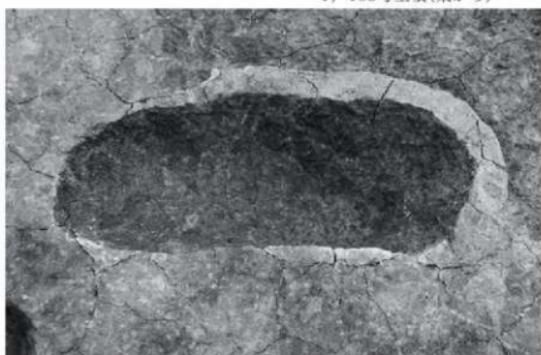
1) 第11次調査区 II区全景(西から) CG合成



2) 第11次調査区 II区全景(北から) CG合成



1) 103号土壤(東から)



2) 104号土壤(北から)



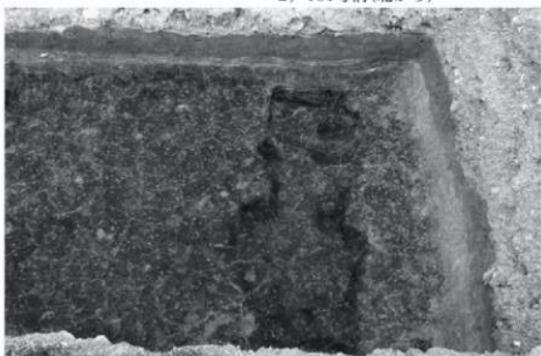
3) 117号土壤(西から)



2) I24号土壤(南から)



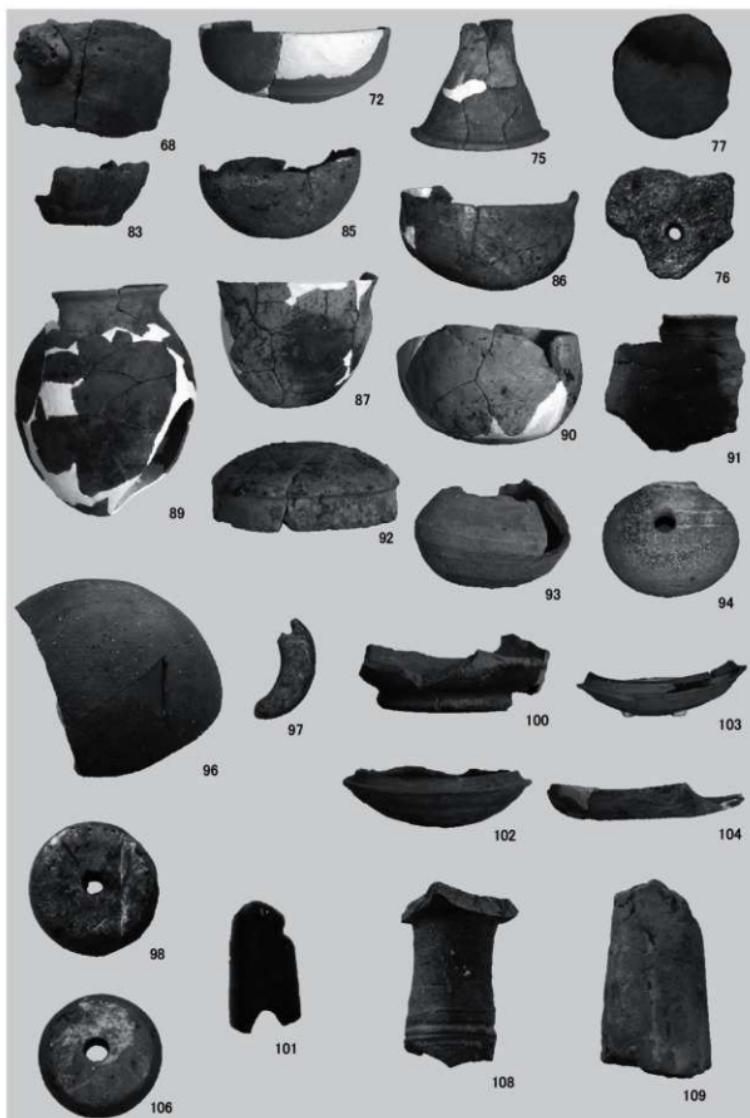
2) 101号溝(北から)



3) 122号溝(西から)



出土遺物1(縮尺不同)



出土遺物2(縮尺不同)



1) 第12次調査区全景（東から） CG合成



2) 第12次調査区全景（南から） CG合成



1) 1号土壤(北から)



2) 2号土壤(東から)



3) 3号土壤(東から)



4) 出土遺物

## 報告書妙録

ふりがな	いそうだCいせき							
書名	井相田C遺跡 10							
副書名	井相田C遺跡第11・12次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1253集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2015年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
井相田C遺跡 第11次調査	福岡市博多区 井相田2丁目 3番7、3番12	40130	54	33° 33' 22"	130° 27' 56"	20130610 20130821 (I区) 20131017 ~	530 m <sup>2</sup>	記録保存 調査
井相田C遺跡 第12次調査	福岡市博多区 井相田2丁目 2番8			33° 33' 20"	130° 27' 54"	20131122 (II区) 20140203 20140317	625 m <sup>2</sup>	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
井相田C遺跡第 11・12次調査	集落	古墳時代～古代	堅穴住居、井戸、 土壙、溝	須恵器、土師器、瓦器、 木製品、石製品、土製品				
要約	<p>井相田C遺跡は、福岡平野の東縁を北流する御笠川中流域の左岸の低丘陵上に拡がる弥生時代から古代・中世までの複合遺跡である。第11次調査では、古墳時代後期の堅穴住居や土壙・溝と平安時代初めの井戸を検出した。立地的には、御笠川の氾濫によって形成された沖積地の微高地に拡がる集落域であり、その西側には谷状の自然流路とその上には水田が形成されていた。これに対して第12次調査区では、鳥居ローマン層上に掘り込まれた土壙や柱穴が検出され、このことは北に隣接する第3次調査区と共に鳥居ローマン層を基盤とする低丘陵上に拡がる井相田C遺跡の東縁にかかる遺構群であることが明らかになった。一方、第3次調査区では、調査区の西には堅穴住居や掘立柱建物からなる集落域が拡がるものとの西端は谷状に落ち込んでいる。このことと第11次調査区の西側に谷状の自然流路があることを勘案すると、この両者は、谷状の自然流路によって隔離されていたと云える。概言すれば、第11次調査区は沖積地の微高地上に形成された島畠遺跡の西縁に立地する可能性も否定できない。</p>							

## 井相田C遺跡 10

-井相田C遺跡第11・12次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告第1253集

2015年(平成27年)3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 (株)九州カスタム印刷